

「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」

— JANPU 会員校における活用状況と課題 —

2019年6月

一般社団法人日本看護系大学協議会 看護学教育評価検討委員会

日本看護系大学協議会 看護学教育評価検討委員会

委員長 小山真理子（日本赤十字広島看護大学）

委員 江川幸二（神戸市看護大学）

亀井智子（聖路加国際大学）

添田啓子（埼玉県立大学）

高橋和子（宮城大学）

田中美恵子（東京女子医科大学）

服部智子（日本赤十字広島看護大学）

平林優子（信州大学）

（五十音順）

目次

I. 本調査の背景と目的	1
II. 調査方法	1
III. 調査結果	2
A. 看護学教育責任者による回答	2
B. 看護専門領域責任者による回答	21
IV. 考察	40
V. 今後の計画	40

【資料】

資料 1. 看護系大学における「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用実態【調査 A】～看護学教育責任者～	42
資料 2. 看護系大学における「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用実態【調査 B】～看護専門領域責任者～	48

I. 本調査の背景と目的

一般社団法人日本看護系大学協議会（以下 JANPU）では「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（※報告書 URL：<http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>）

（以下、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」とする）を 2018 年 6 月に発表した。看護学教育評価検討委員会では 2018～2019 年度の活動として、この「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を各大学の看護学教育に有効に活用するための広報活動や研修会等を計画している。

本調査の目的は、これらの活動計画をより効果的に実施するための事前準備として、JANPU 会員校で「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」をどのように活用しているのかについての実態を把握するとともに、カリキュラム作成や各科目の授業構築にあたって活用する上での困難点や課題を明らかにすることである。本調査の結果は、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用支援ガイドや研修プログラム作成に役立つ予定である。

II. 調査方法

1. 調査対象

調査は看護学教育責任者（学部長、学科長、専攻長など）を対象とする「調査 A」、および看護専門領域の責任者である教員を対象とする「調査 B」の 2 種類とした。調査 A は各校 1 名、調査 B は各校 5 名の異なる看護専門領域責任者に回答を依頼した。

2. 調査方法

JANPU 事務局から会員校 277 校へ調査依頼についてメール配信した。調査は Google フォームを用い、上記の対象者に回答入力を依頼した。

3. 調査期間

2018 年 12 月 19 日(水)～2019 年 1 月 21 日(月)

4. 分析方法

量的調査項目は度数を集計し、質的調査項目および自由記載回答は、内容分析を行った。

Ⅲ. 調査結果

A. 看護学教育責任者による回答

1. 回答者の概要

会員校 277 校のうち、回答大学数は 133 校(回答率 48.0%)であった。回答校の設置主体は、「国立大学(省庁大学校を含む)」が 29 校(21.8%)、「公立大学」が 31 校(23.3%)、「私立大学」が最も多く 73 校(54.9%)であった。所在地域は、「関東」が 36 校(27.1%)、次いで「中国・四国」24 校(18.0%)、「関西」21 校(15.8%)の順であった。

看護系学部・学科等の設置時期は、「20 年以上前」が最も多く 45 校(33.8%)、次いで「10～14 年前」29 校(21.8%)、「5～9 年前」24 校(18.0%)、「15～19 年前」21 校(15.8%)の順であり、「4 年以内」の大学は 14 校(10.5%)で最も少なかった。

回答者の職位は「学科長」55 校(41.4%)、次に「学部長」48 校(36.1%)であり、教員としての経験年数は、「20 年以上」が 88 校(66.2%)で最も多かった(表 1)。

項目		n	
		n	%
設置主体	国立大学(省庁大学校を含む)	29	21.8
	公立大学	31	23.3
	私立大学	73	54.9
所在地域	北海道	8	6.0
	東北	10	7.5
	関東	36	27.1
	中部	18	13.5
	関西	21	15.8
	中国・四国	24	18.0
	九州・沖縄	16	12.0
看護系学部・学科等の設置時期	4年以内	14	10.5
	5～9年前	24	18.0
	10～14年前	29	21.8
	15～19年前	21	15.8
	20年以上前	45	33.8
職位	学長	3	2.3
	学部長	48	36.1
	学科長	55	41.4
	その他	27	20.3
教員としての経験年数	4年以内	1	0.8
	5～9年	3	2.3
	10～14年	15	11.3
	15～19年	26	19.5
	20年以上	88	66.2

2. 大学でカリキュラムを改訂するタイミング

各大学でカリキュラムを改訂するタイミングは、「大学の方針に合わせて（随時）」が 114 校（85.7%）、「保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正後」100 校（75.2%）、アドミッションポリシー（以下 AP）・カリキュラムポリシー（以下 CP）・ディプロマポリシー（以下 DP）の「3つのポリシーの変更にもなって」95 校（71.4%）の順であった。「定期的」は 20 校（15.0%）で最も少なかった（図 1）。その他の自由記述を整理したところ、「改訂が必要な場合（必要時）」、「モデル・コア・カリキュラムに合わせて変更する」、「カリキュラム評価の結果に基づき見直す」、「指定規則の改変」などの記述があった。

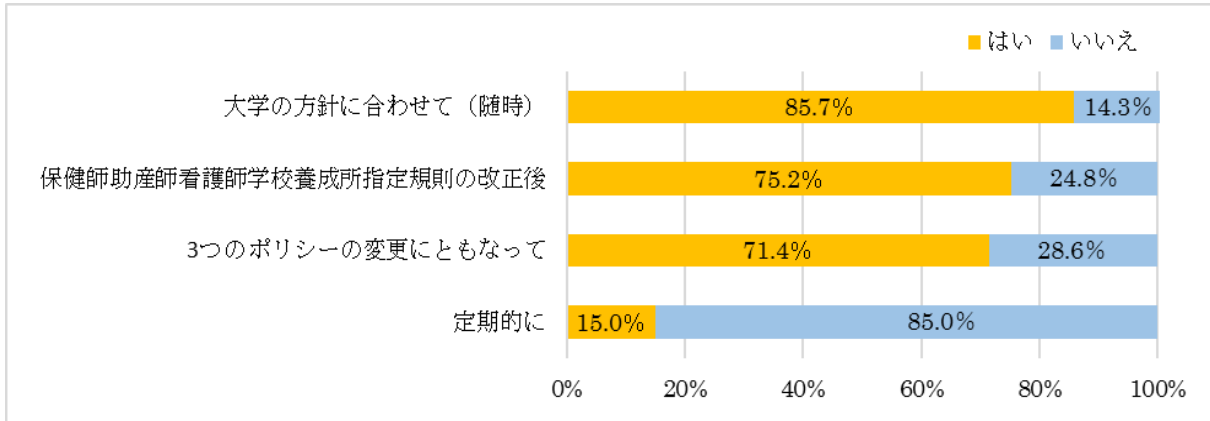


図 1 大学でカリキュラムを改訂するタイミング

n=133 校

3. 大学でカリキュラムを改訂する際に参考にしているもの

各大学でカリキュラムを改訂する際に参考にしているものは、「非常に参考にしている」「やや参考にしている」を合わせた割合が最も高かったのが「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」および「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」で、ともに 95.5%であった。次いで高かったのは、「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」で、「非常に参考にしている」のみの割合は 6 割を超えていた（図 2）。カリキュラム作成で参考にすることの自由記述では、「大学のミッションや教育方針、計画」、「社会情勢や地域環境の動向」、「他大学のカリキュラム等」、「文部科学省および厚生労働省からの資料」などが挙げられた。

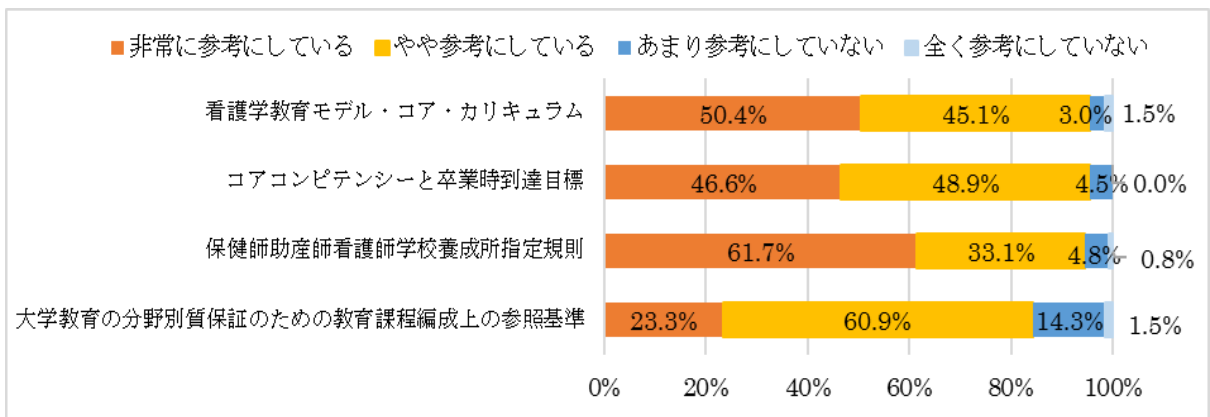


図 2 大学でカリキュラムを改訂する際に参考にしているもの

n=133 校

4. 大学でカリキュラムを改訂する際に困難なこと

各大学でカリキュラムを改訂する際に困難なことは、「教員確保」が最も多く 109 校 (82.0%)、次いで「実習施設の確保」99 校 (74.4%)、「教員間の共通理解・合意形成」88 校 (66.2%) であった。困難なこととして最も少なかったのは、「3 つのポリシーとカリキュラムの整合性の確保」で 46 校 (34.6%) であった (図 3)。自由記述は、133 校中 65 校から 70 件の記述があり、それらは 8 つのカテゴリーに整理された (表 2)。

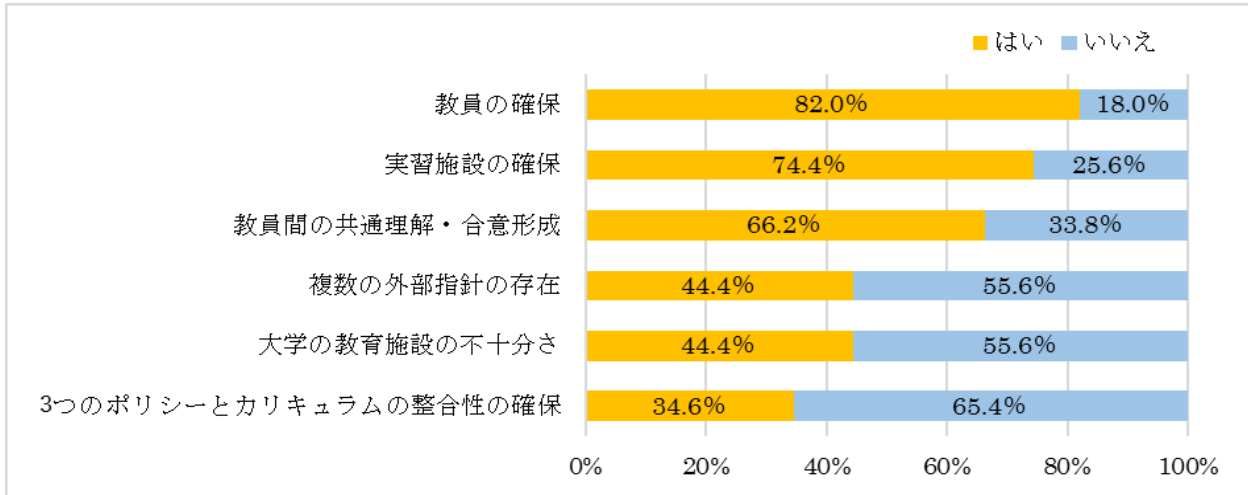


図 3 大学でカリキュラムを改訂する際に困難なこと

n=133 校

表 2 大学でカリキュラムを改訂する際に困難なこと (自由記述)

n=65 校

カテゴリー	サブカテゴリー (件数)	具体的内容 (例)
大学内の調整に関する困難 (21)	他学部・他学科との調整 (11)	<ul style="list-style-type: none"> 他学部、他学科との調整が困難 他学部、他学科の共通科目との調整が困難 領域横断的なカリキュラムにするための合意形成が困難
	大学全体の教育方針とのすり合わせの困難 (8)	<ul style="list-style-type: none"> 大学全体の教育方針との乖離 カリキュラム改革など大学全体の方針との調整が必要 総合大学であるため、大学全体の方針に沿うことも必要 大学の運営上、方針がなかなか決まらない
	看護以外の学内関係者との意見の相違 (2)	<ul style="list-style-type: none"> 国家試験のない学部を理解してもらうことが困難 看護職以外で占められている大学幹部の方針や意見との相違
教員の理解不足 (教員の数や業務量) (18)	教員数の不足・業務量の問題 (10)	<ul style="list-style-type: none"> 教員数が不足している 教員ごとの仕事量の均等化が困難 カリキュラム改正のための委員会設置に伴う人材確保の困難 教員の異動に伴う問題への対応
	教員の理解不足 (8)	<ul style="list-style-type: none"> カリキュラム作成、改正に関する教員の知識が乏しい 各領域の捉え方、教員の理解度には温度差がある 教員によって考え方や優先度に違いがある リーダーシップをとる者がおらず、教員間での共通理解が困難

表2 つづき

カテゴリー	サブカテゴリー(件数)	具体的内容(例)
カリキュラムの過密(11)	時間割作成の困難(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・時間割の作成が困難 ・非常勤講師の担当科目の再編が困難
	大学の独自性の組み込み方(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の指針のもとに大学の独自性を組み込むことが困難 ・教育内容が膨らみ、教育内容の自由度が失われ、各校の特徴が出しにくくなっている
	単位数の増大による学生生活への影響(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな基準を満たし、理想を追求すると過密カリキュラムになり、学生生活のバランスが悪くなる ・複数の外部基準に添ったカリキュラムを検討していくと単位数が多くなる ・多くの授業により、学生にゆとりある学習を保証することが困難
	選択科目の導入の困難(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・必修科目で時間をとられ、多様な選択科目の導入が難しい ・教養科目をどこまで充実させるのかが難しい
十分な議論の不足(7)	検討時間の不足(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の確保が難しく、十分に検討する時間がとれない ・国立大学は人員が少ないため、時間の捻出に苦慮
	DPなどの議論がされていない(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・DPと一般教養科目とのつながりを明確にすることが困難 ・CPやDPに必要な教育観の議論がなされていない
実習に関する困難(6)	実習施設確保の困難(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・実習施設を利用している他大学との時期や人数の調整が困難 ・病院をもたない大学であるため、実習施設の確保に苦労、特に助産学生の分娩助10例達成するための施設の確保が困難 ・実習目標の達成に適した施設の確保が困難
	実習施設との実習目標等の共有の困難	<ul style="list-style-type: none"> ・実習施設側との実習目標、指導方法の共有が困難
	実習方法に関する情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ・地域包括ケアを見据えた多職種連携の実習を検討する際に、具体的な自習方法に関する情報収集が困難
複数の外部指針の存在(3)	複数の外部指針を一本化してほしい(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の外部指針を一本化するか整合性を示してくれることで、カリキュラム構築の困難が軽減する ・複数の外部指針があること
	複数の外部指針の見極めが困難	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の外部指針の特徴を見極めることが難しい
人的・物的資源の不足(2)	事務担当者がいない	<ul style="list-style-type: none"> ・文部科学省に提出する書類についての専門的事務担当者がいない
	教室が足りない	<ul style="list-style-type: none"> ・教室数が学生人数に比較して足りない
学生の能力(2)	学生のレディネスや学習能力(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・学生のレディネスが不十分 ・学生の学習能力等の問題

5. 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用状況

大学で「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用しているかどうかについては、「活用している」59校(44.4%)で、「活用方法を検討している」が65校(48.9%)、「活用を予定していない」は9校(6.8%)で、ほとんどの大学で活用について考慮されていた。

「活用している」と回答した大学の自由記述は54校からあり、表3-1に示す7つのカテゴリーに集約された。＜現行カリキュラムの評価や見直し＞に関する記述が最も多く26件で、具体的には、「各項目と教育内容の整合性をすべて確認した」、「コアコンピテンシーに基づき既存のカリキュラムとの照合をした」などの記述があった。次いで多かったのは、＜教育や授業の評価方法＞(11件)、＜新カリキュラム作成時の参考資料＞(10件)であった。

表 3-1 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用状況（自由記述）n=54 校

カテゴリー	サブカテゴリー(件数)	具体的内容(例)
現行カリキュラムの評価や見直し(26)	現行カリキュラムとの照合、評価、見直し(17)	<ul style="list-style-type: none"> ・モデル・コア・カリキュラムと平行して確認作業を実施中 ・各項目と教育内容の整合性をすべて確認 ・既存のカリキュラムと照合 ・到達目標の妥当性について検討 ・現行のカリキュラムとの対照表を作成、現行カリキュラムの課題を明らかにした ・カリキュラムの見直し、自己点検の際の教育評価
	シラバスの作成(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・シラバス作成時に活用
	授業内容の検討(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・各教員が授業計画を立て、評価基準を考えるとときに参考にしている ・授業内容の検討に活用
教育や授業の評価方法(11)	到達目標の検討(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・教育評価指標(実習評価指標他)の設定に参考になっている ・講義、演習、実習における到達目標の検討 ・卒業時到達度設定の参考 ・各科目の到達目標の見直し ・学年ごとの到達目標に降ろし、学生指導に活用 ・学年別到達レベルの策定に活用
	学生からの教育評価(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・学生への調査を実施し、教育評価に活用 ・卒業前の学生に自己評価してもらい、その結果をカリキュラムやシラバスに活用
	自己点検・評価(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程の評価・点検として活用、特に看護実践能力の育成の検討に活用
新カリキュラム作成時の参考資料(10)	カリキュラム改正時に照合(10)	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム編成の際に照合、内容を確認 ・カリキュラムの変更時参考にした ・カリキュラム作成にあたり、内容を加味したカリキュラムになるようしている ・DP とシラバス作成時に内容と表現を参考にした ・新カリキュラム作成時に整合性を検討した
3つのポリシーの点検・策定(7)	DP、CP の点検・見直し(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・DP、CP の見直しに活用 ・コアコンピテンシーに含まれる要素と CP との整合性を確認 ・自学の3つのポリシーとの比較 ・DP の評価指標および評価項目作成に活用
	3つのポリシーの策定	<ul style="list-style-type: none"> ・3つのポリシーの策定の際に活用
実習(5)	実習目標の設定(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・実習目標の検討 ・実習における目標達成度の評価 ・実習における各学生の到達度の確認
	実習の組み方	<ul style="list-style-type: none"> ・実習の組み方に活用
	実習施設での説明	<ul style="list-style-type: none"> ・実習施設での説明に活用
教員内での検討(5)	委員会で検討(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・教務委員会での検討に活用 ・カリキュラム委員会のメンバー間で共有 ・検討会での参考資料
	勉強会で教員間の共通理解(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・学会内での共通理解に活用 ・カリキュラム改訂時の学科内での勉強会の活用
病院との連携(2)	病院との連携(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・附属病院看護部との連携でクリニカルラダー作成の際に活用

「活用方法を検討している」と回答した大学 65 校の具体的な検討内容は、設問に挙げた項目のうち、「既存のカリキュラムと照合している」が 54 校 (83.1%) で最も割合が高く、次に「3つのポリシーなどと照合している」40 校 (61.5%)、「勉強会を開催している」16 校 (24.6%) であった (図 4)。

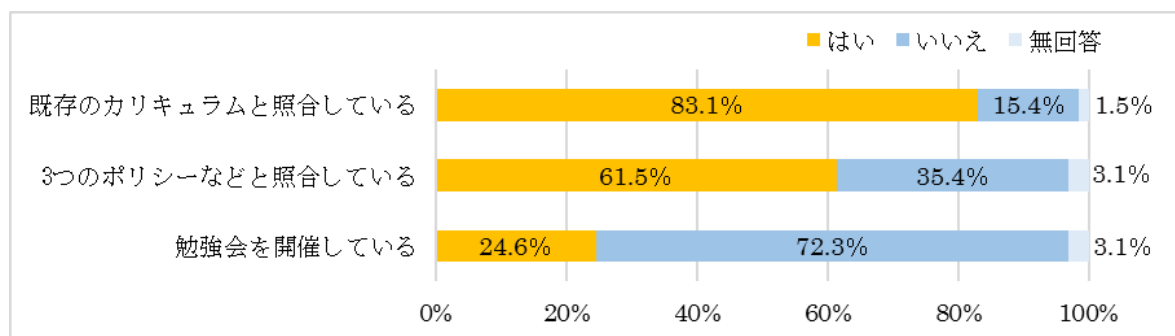


図 4 大学で「活用を検討している」場合の具体的な内容 n=65 校

「活用方法を検討している」と回答した大学の検討内容の自由記述は 12 校からあり、カリキュラムについての学習会 (FD) の開催による<教員の共通理解> (5 件)、現行カリキュラムと照合予定であることや、カリキュラム改正時に参考することを含む<カリキュラム検討> (4 件) が記述されていた (表 3-2)。

表 3-2 大学で「活用を検討している」場合の具体例 (自由記述) n=12 校

カテゴリー	具体的内容 (例)
教員の共通理解 (5)	・カリキュラムについての学習会 (FD) の開催
カリキュラム検討 (4)	・現行カリキュラムと照合予定 ・カリキュラム改正時に参考
アセスメントポリシーの検討	・3つのポリシーに基づき、アセスメントポリシーの検討
独自に作成したツールによる到達レベルのチェック	・教科内容の照合および看護技術ノートの作成による到達度のチェック
今後活用方法を検討	・具体的な活用を今後検討予定

「活用を予定していない」と回答した大学のうち 8 校から理由の回答があった。理由としては、他の指針との整合性を優先 (5 件) が最も多かった。具体的には、「モデル・コア・カリキュラムとの照合を優先」「DP との整合性を優先」、「指定規則や大学の方針を優先」が挙げられた。その他の理由では、「学内での周知不足」、「リーダーシップをとる教員の不在」、「参考にするが活用はしない」が記述されていた。

6. 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を大学で活用する上での課題

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を大学で活用する上での課題についての回答は、図5に示す通りであった。設問に対して、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合わせた割合が最も高かったのは、「検討するための時間が不足している」で78.2%、次いで「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない」、「教員への周知が十分でない」、「日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない」「教員の関心・意識が低い」「卒業時の到達目標の抽象度が高い」の順であった。

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の内容を活用しにくい理由について自由記述で回答を求めたところ9校から記載があり、表4の内容に集約された。理解や説明を図る必要性に関わることや、表記内容、到達目標の課題が挙げられた。

いずれも、時間の不足に関わることや、十分な理解に至っていないことに関わること課題として感じている傾向があった。

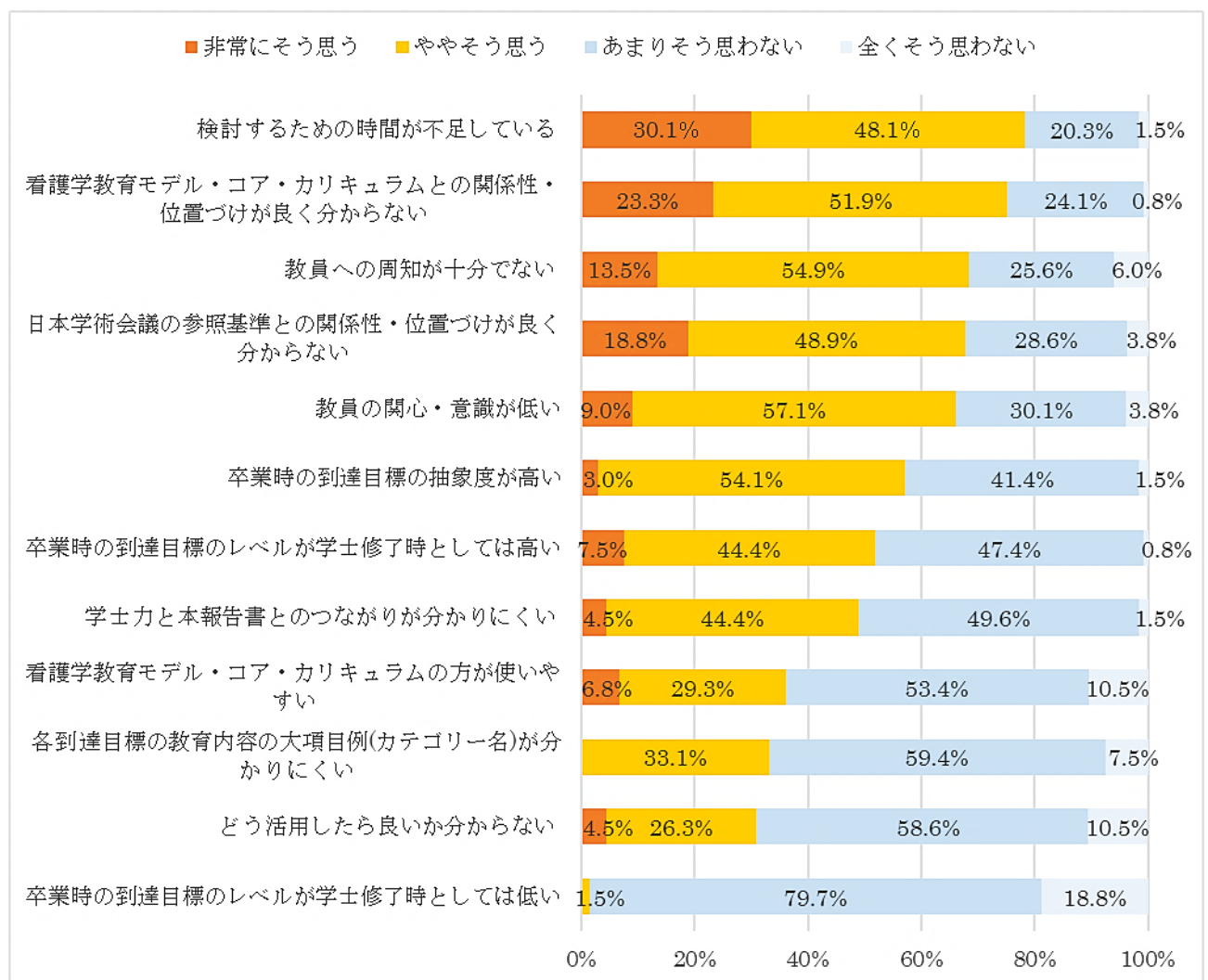


図5 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を大学で活用する上での課題 n=133校

表4 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を大学で活用しにくい理由（自由記述）n=9校

カテゴリー	具体的内容(例)
理解や説明のニーズ(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・能力到達のために何を入れればよいかわからない ・強制力を示すことが必要 ・網羅すると時間数が不足 ・能力評価の基準が教員ごとに少しずつ異なる
到達目標の課題(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・活用する人の理解と創意工夫する力が必要 ・到達レベルが不明瞭
表記内容の課題(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・到達目標が高い ・項目構成例がない ・教育内容の抽象度が異なる

7. 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学のカリキュラムでの活用計画

回答校のうち約6割で各領域での活用や、各科目での活用の伝達をしていた。「大学全体のカリキュラムに導入予定である」と答えたのは69校(51.9%)で、約半数であった(図6)。「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」について大学での活用の予定がない場合の理由は、7校で自由記述があり、以下の内容が挙げられた(表5)。

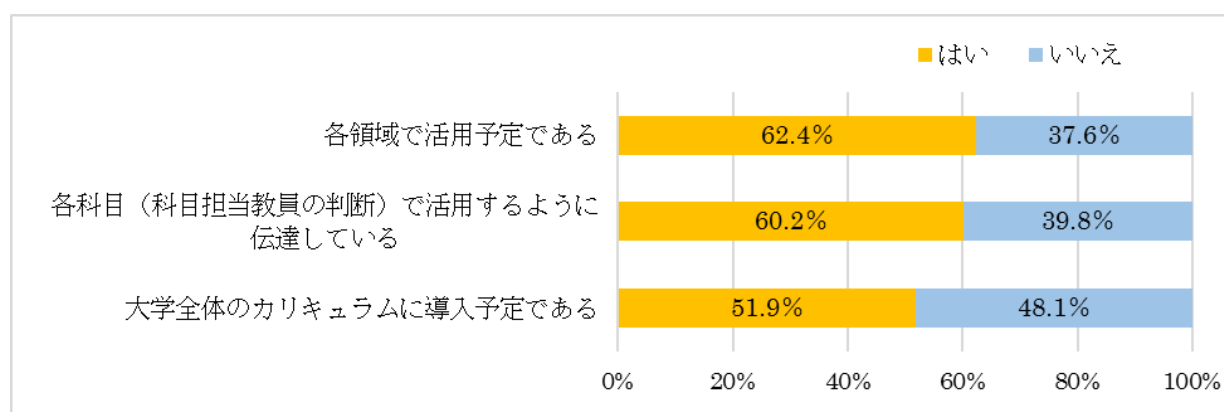


図6 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学のカリキュラムでの活用計画 n=133校

表5 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用予定がない理由（自由記述）

n=7校

理由(件数)
・カリキュラム改定の時期により活用予定はない(2)
・大学全体との関係で活用は難しい (2)
・すでに網羅している
・文科省への申請内容を遵守
・教員の意識が育っていない

具体的活用計画は、42校から50件の自由記述の回答があり、「すでに活用」「活用中」「活用予定」「その他の意見」に整理された（表6）。

表6 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での具体的活用計画（自由記述）n=42校

活用状況(件数)	活用計画(件数)
活用予定(29)	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム評価に活用予定(6) ・カリキュラム改正時に活用予定(4) ・カリキュラム改正の参考資料とする(4) ・カリキュラム改正準備に活用予定(2) ・科目設定・科目内容の見直しに活用予定(3) ・科目内容・シラバスに反映予定(3) ・学習会で学習予定(3) ・科目構成の検討に活用予定 ・卒業時到達目標の見直しに活用予定 ・自己点検・評価に活用予定 ・検討していきたいが計画は未定
すでに活用(11)	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム構築・改定に活用(2) ・カリキュラムマップ・科目構成に参考にした(2) ・カリキュラム評価に活用(2) ・カリキュラム評価と不足内容の強化に活用(2) ・到達レベルを明確にするために活用 ・科目内容の確認に利用 ・シラバス作成に活用
活用中(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・教授内容を確認している ・領域ごとに対応を確認 ・科目責任者に対応を依頼中
その他の意見(7)	<ul style="list-style-type: none"> ・他の基準と合わせて活用を検討(3) ・モデル・コア・カリキュラム、指定規則など ・指定規則改定後カリキュラム検討を開始予定 ・今後カリキュラム見直し、シラバスに記載する ・コンピテンシーの内容を確認するよう伝えたい ・能力の評価基準を悩む

8. 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用に必要なと思う支援や研修

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用のために必要と思う支援や研修については、「活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供」、「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関連性についての説明」、「活用するための教員の研修会やFD企画の支援」の割合が高く、「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせて約8割を占めていた。また、「活用するための具体的な方法の解説が必要である」と回答した大学は約7割を超えていた。活用するための相談窓口やカリキュラムへの導入に対する支援を必要と思う割合は他と比べて低く、自大学での導入に向けた具体的な支援よりも、他大学の情報や、看護学教育モデル・コア・カリキュラムの関連性についての説明を求める割合が高かった（図7）。

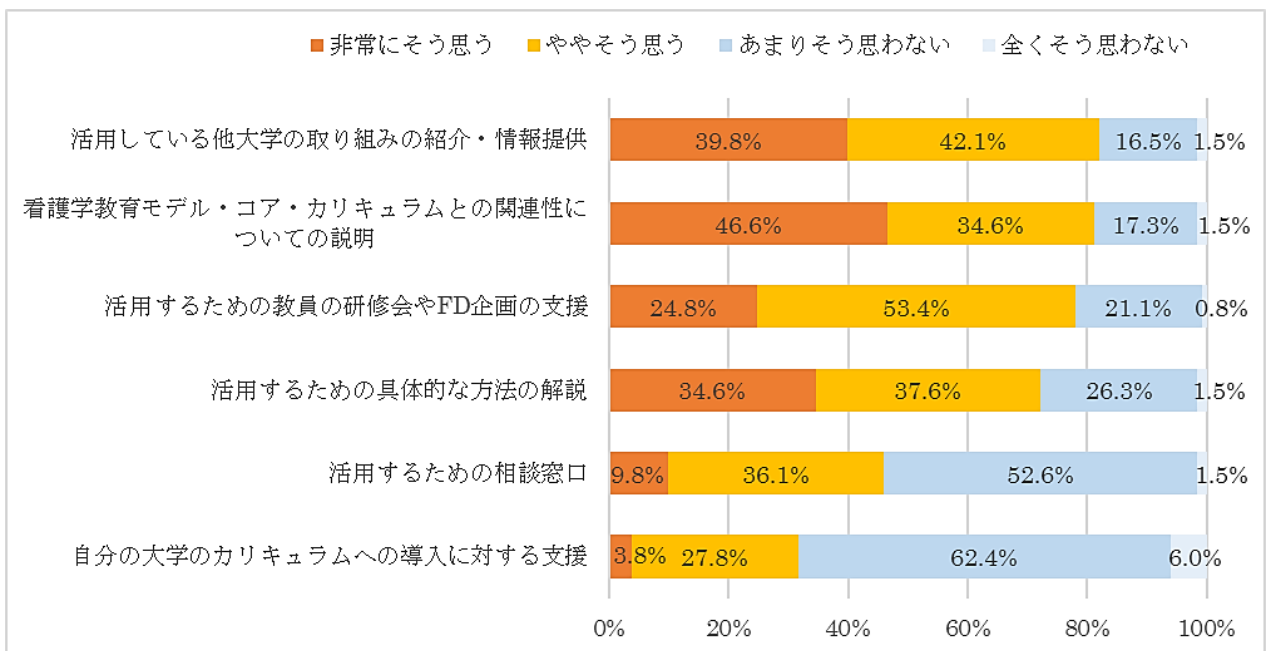


図7 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用に必要なと思う支援や研修 n=133校

上記以外に、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用に必要な研修の希望に関する自由記述では、「相違を周知することが必要」2件、「カリキュラム作成過程の学習が必要」1件、「参加しやすい研修（地域ブロック制や遠隔研修）を希望」1件の回答があった。その他、活用についての自由な意見として「指標として使用されることが望ましい」という意見や、「カリキュラムは各大学が独自に検討すべきもの」などの記述もあった。

9. 看護学教育責任者の「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に関わる回答のクロス集計結果

1) 大学の設置主体別比較

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況は、公立大学で「活用している」が17校(54.8%)と半数を超えており割合がやや高かった。私立大学よりも、国立大学(省庁大学校を含む、以下同様)や公立大学で、「活用している」割合がやや高い傾向があった。ほとんどの設置主体で、「活用している」か「活用を検討している」状況であり、合計した割合はいずれも9割を占めていた。(表7)。

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での課題では、国立大学で、「検討するための時間が不足している」「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない」「教員の関心・意識が低い」で「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせた割合が7割を超えており、「検討するための時間が不足している」は9割で最も高かった。私立大学でも、「検討するための時間が不足している」の割合が高く約8割で、次いで「教員への周知が十分でない」「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない」であった。公立大学では、「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない」のみが7割を超えており、最も割合が高かった。

「卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては高い」は、いずれの大学においても、高いと思うか、思わないかの割合がおおむね50%前後であり、回答が分かれていた(表8)。

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」のカリキュラムへの活用計画では、国立大学で「大学全体のカリキュラムに導入予定である」を答えた割合が34.5%であり、公立大学、私立大学の約6割よりもやや低かった(表9)。

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用のために必要と思う支援や研修では、「非常にそう思う」「ややそう思う」割合が8割を超えていたのは国立大学で「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関連性についての説明が必要である」で、次いで「活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である」「活用するための教員の研修会やFD企画の支援が必要である」であった。これらは、私立大学でも同様に割合が高かった。公立大学は、「非常にそう思う」「ややそう思う」割合が8割を超えていたのは無かったが、「活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である」が77.4%で最も高かった(表10)。

表7 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用状況の設置主体別比較 n=133校

項目	国立大学 (省庁大学校を含む)		公立大学		私立大学		
	n=29		n=31		n=73		
	n	%	n	%	n	%	
現在の活用状況	活用している	14	48.3	17	54.8	28	38.4
	活用方法を検討している	13	44.8	12	38.7	40	54.8
	活用を予定していない	2	6.9	2	6.5	5	6.8

表8 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を大学で活用する上での課題の設置主体別比較
n=133校

項目		国立大学 (省庁大学校を含む)		公立大学		私立大学	
		n=29		n=31		n=73	
		n	%	n	%	n	%
学士力と本報告書とのつながりが分かりにくい	非常にそう思う	1	3.4	3	9.7	2	2.7
	ややそう思う	16	55.2	12	38.7	31	42.5
	あまりそう思わない	11	37.9	16	51.6	39	53.4
	全くそう思わない	1	3.4	-	-	1	1.4
卒業時の到達目標の抽象度が高い	非常にそう思う	2	6.9	1	3.2	1	1.4
	ややそう思う	14	48.3	14	45.2	44	60.3
	あまりそう思わない	11	37.9	16	51.6	28	38.4
	全くそう思わない	2	6.9	-	-	-	-
卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては高い	非常にそう思う	1	3.4	2	6.5	7	9.6
	ややそう思う	15	51.7	11	35.3	33	45.2
	あまりそう思わない	13	44.8	18	58.1	32	43.8
	全くそう思わない	-	-	-	-	1	1.4
卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては低い	非常にそう思う	-	-	-	-	-	-
	ややそう思う	-	-	2	6.5	-	-
	あまりそう思わない	21	72.4	24	77.4	61	83.6
	全くそう思わない	8	27.6	5	16.1	12	16.4
各到達目標の教育内容の大項目例(カテゴリー名)が分かりにくい	非常にそう思う	-	-	-	-	-	-
	ややそう思う	8	27.6	9	29.0	27	37.0
	あまりそう思わない	16	55.2	18	58.1	45	61.6
	全くそう思わない	5	17.2	4	12.9	1	1.4
教員への周知が十分でない	非常にそう思う	5	17.2	2	6.5	11	15.1
	ややそう思う	15	51.7	15	48.4	43	58.9
	あまりそう思わない	7	24.1	12	38.7	15	20.5
	全くそう思わない	2	6.9	2	6.5	4	5.5
教員の関心・意識が低い	非常にそう思う	4	13.8	2	6.5	6	8.2
	ややそう思う	18	62.1	16	51.6	42	57.5
	あまりそう思わない	7	24.1	12	38.7	21	28.8
	全くそう思わない	-	-	1	3.2	4	5.5
検討するための時間が不足している	非常にそう思う	12	41.4	7	22.6	21	28.8
	ややそう思う	14	48.3	14	45.2	36	49.3
	あまりそう思わない	3	10.3	10	32.3	14	19.2
	全くそう思わない	-	-	-	-	2	2.7
看護学教育モデル・コア・カリキュラムの方が使いやすい	非常にそう思う	2	6.9	3	9.7	4	5.5
	ややそう思う	7	24.1	12	38.7	20	27.4
	あまりそう思わない	17	58.6	12	38.7	42	57.5
	全くそう思わない	3	10.3	4	12.9	7	9.6
看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない	非常にそう思う	10	34.5	6	19.4	15	20.5
	ややそう思う	14	48.3	16	51.6	39	53.4
	あまりそう思わない	5	17.2	9	29.0	18	24.7
	全くそう思わない	-	-	-	-	1	1.4
日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない	非常にそう思う	7	24.1	5	16.1	13	17.8
	ややそう思う	13	44.8	14	45.2	38	52.1
	あまりそう思わない	7	24.1	12	38.7	19	26.0
	全くそう思わない	2	6.9	-	-	3	4.1
どう活用したら良いか分からない	非常にそう思う	2	6.9	1	3.2	3	4.1
	ややそう思う	8	27.6	5	16.1	22	30.1
	あまりそう思わない	15	51.7	20	64.5	43	58.9
	全くそう思わない	4	13.8	5	16.1	5	6.8

表9 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用計画の設置主体別比較 n=133校

項目		国立大学 (省庁大学校を含む)		公立大学		私立大学	
		n=29		n=31		n=73	
		n	%	n	%	n	%
大学全体のカリキュラムに導入 予定である	はい	10	34.5	17	54.8	42	57.5
	いいえ	19	65.5	14	45.2	31	42.5
各領域で活用予定である	はい	18	62.1	19	61.3	46	63.0
	いいえ	11	37.9	12	38.7	27	37.0
各科目(科目担当教員の判断)で 活用するように伝達している	はい	18	62.1	20	64.5	42	57.5
	いいえ	11	37.9	11	35.5	31	42.5

表10 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用に必要な支援や研修の
設置主体別比較 n=133校

項目		国立大学 (省庁大学校を含む)		公立大学		私立大学	
		n=29		n=31		n=73	
		n	%	n	%	n	%
活用している他大学の取り組 みの紹介・情報提供が必要で ある	非常にそう思う	13	44.8	8	25.8	32	43.8
	ややそう思う	10	34.5	16	51.6	30	41.1
	あまりそう思わない	5	17.2	6	19.4	11	15.1
	全くそう思わない	1	3.4	1	3.2	-	-
看護学教育モデル・コア・カ リキュラムとの関連性につい ての説明が必要である	非常にそう思う	15	51.7	16	51.6	31	42.5
	ややそう思う	9	31.0	6	19.4	31	42.5
	あまりそう思わない	4	13.8	8	25.8	11	15.3
	全くそう思わない	1	3.4	1	3.2	-	-
活用するための具体的な方法 の解説が必要である	非常にそう思う	11	37.9	10	32.3	25	34.2
	ややそう思う	8	27.6	11	35.5	31	42.5
	あまりそう思わない	9	31.0	9	29.0	17	23.3
	全くそう思わない	1	3.4	1	3.2	-	-
活用するための相談窓口が必 要である	非常にそう思う	2	6.9	3	9.7	8	11.0
	ややそう思う	10	34.5	8	25.8	30	41.1
	あまりそう思わない	16	55.2	19	61.3	35	47.9
	全くそう思わない	1	3.4	1	3.2	-	-
自分の大学のカリキュラムへ の導入に対する支援が必要で ある	非常にそう思う	1	3.4	2	6.5	2	2.7
	ややそう思う	6	20.7	6	19.4	25	34.2
	あまりそう思わない	18	62.1	21	67.7	44	60.3
	全くそう思わない	4	13.8	2	6.5	2	2.7
活用するための教員の研修会 やFD企画の支援が必要である	非常にそう思う	4	13.8	6	19.4	23	31.5
	ややそう思う	17	58.6	15	48.4	39	53.4
	あまりそう思わない	8	27.6	9	29.0	11	15.1
	全くそう思わない	-	-	1	3.2	-	-

2) 大学の開設時期別比較

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況は、5～9年前に開設した大学で「活用している」割合が最も高く、58.3%であった。4年以内の大学では、他の開設時期の大学の「活用している」割合が4～6割であるのに対し、14.3%と最も低く、「活用方法を検討している」割合は78.6%で最も高かった（表11）。

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での課題では、4年以内に開設した大学で、「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない」「日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない」の「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせた割合が最も高く、約9割であった。次いで高かったのが「検討するための時間が不足している」で85.7%を示していた。「検討するための時間が不足している」は、10～14年前に開設した大学以外で、8割以上が、「非常にそう思う」「ややそう思う」と回答していた。「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない」は、10～14年前および、20年以上前に設置した大学でも「非常にそう思う」「ややそう思う」割合が8割以上と高かった（表12）。

活用計画については、開設時期が「20年以上前」の大学では、「大学全体のカリキュラムに導入予定である」が4割であり、他の開設時期の大学が5～7割弱であったのに対し、割合が低かった（表13）。

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用のために必要と思う支援や研修は、開設時期が4年以内の大学では「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関連性についての説明が必要である」の「非常にそう思う」「ややそう思う」と回答した割合が最も高く、92.9%であった。「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関連性についての説明が必要である」「活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である」「活用するための教員の研修会やFD企画の支援が必要である」に関しては、いずれの開設時期においても、おおよそ「非常にそう思う」「ややそう思う」と回答した割合が高かった。開設時期が10～14年前の大学および20年以上前の大学では、「非常にそう思う」「ややそう思う」の回答が8割を超えるものが少なく、他と比較して全体的に割合が低い傾向であった（表14）。

表11 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用状況の開設時期別比較 n=133校

項目	4年以内 n=14		5～9年前 n=24		10～14年前 n=29		15～19年前 n=21		20年以上前 n=45	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	現在の活用状況									
活用している	2	14.3	14	58.3	16	55.2	9	42.9	18	40.0
活用方法を検討している	11	78.6	8	33.3	11	37.9	11	52.4	24	53.3
活用を予定していない	1	7.1	2	8.3	2	6.9	1	4.8	3	6.7

表 12 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を大学で活用する上での課題の開設時期別比較
n=133校

項目	4年以内 n=14		5～9年前 n=24		10～14年前 n=29		15～19年前 n=21		20年以上前 n=45		
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	
学士力と本報告書のつながりが分かりにくい	非常にそう思う	1	7.1	1	4.2	2	6.9	-	-	2	4.4
	ややそう思う	7	50.0	9	37.5	13	44.8	10	47.6	20	44.4
	あまりそう思わない	6	42.9	14	58.3	13	44.8	11	52.4	22	48.9
	全くそう思わない	-	-	-	-	1	3.4	-	-	1	2.2
卒業時の到達目標の抽象度が高い	非常にそう思う	-	-	-	-	3	10.3	1	4.8	-	-
	ややそう思う	8	57.1	14	58.3	15	51.7	10	47.6	25	55.6
	あまりそう思わない	6	42.9	10	41.7	11	37.9	9	42.9	19	42.2
	全くそう思わない	-	-	-	-	-	-	1	4.8	1	2.2
卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては高い	非常にそう思う	1	7.1	2	8.3	2	6.9	2	9.5	3	6.7
	ややそう思う	9	64.3	8	33.3	11	37.9	11	52.4	20	44.4
	あまりそう思わない	4	28.6	14	58.3	16	55.2	7	33.3	22	48.9
	全くそう思わない	-	-	-	-	-	-	1	4.8	-	-
卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては低い	非常にそう思う	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ややそう思う	-	-	1	4.2	1	3.4	-	-	-	-
	あまりそう思わない	13	92.9	21	87.5	19	65.5	16	76.2	37	82.2
	全くそう思わない	1	7.1	2	8.3	9	31.0	5	23.8	8	17.8
各到達目標の教育内容の大項目例(カテゴリー名)が分かりにくい	非常にそう思う	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	ややそう思う	7	50.0	7	29.2	8	27.6	8	38.1	14	31.1
	あまりそう思わない	6	42.9	17	70.8	21	72.4	10	47.6	25	55.6
	全くそう思わない	1	7.1	-	-	-	-	3	14.3	6	13.3
教員への周知が十分でない	非常にそう思う	2	14.3	5	20.8	2	6.9	2	9.5	7	15.6
	ややそう思う	9	64.3	12	50.0	18	62.1	12	57.1	22	48.9
	あまりそう思わない	1	7.1	6	25.0	6	20.7	7	33.3	14	31.1
	全くそう思わない	2	14.3	1	4.2	3	10.3	-	-	2	4.4
教員の関心・意識が低い	非常にそう思う	2	14.3	2	8.3	1	3.4	1	4.8	6	13.3
	ややそう思う	7	50.0	13	54.2	20	69.0	11	52.4	25	55.6
	あまりそう思わない	2	14.3	9	37.5	7	24.1	9	42.9	13	28.9
	全くそう思わない	3	21.4	-	-	1	3.4	-	-	1	2.2
検討するための時間が不足している	非常にそう思う	2	14.3	5	20.8	9	31.0	4	19.0	20	44.4
	ややそう思う	10	71.4	15	62.5	8	27.6	13	61.9	18	40.0
	あまりそう思わない	1	7.1	4	16.7	11	37.9	4	19.0	7	15.6
	全くそう思わない	1	7.1	-	-	1	3.4	-	-	-	-
看護学教育モデル・コア・カリキュラムの方が使いやすい	非常にそう思う	-	-	2	8.3	3	10.3	-	-	4	8.9
	ややそう思う	7	50.0	5	20.8	7	24.1	8	38.1	12	26.7
	あまりそう思わない	5	35.7	13	54.2	18	62.1	12	57.1	23	51.1
	全くそう思わない	2	14.3	4	16.7	1	3.4	1	4.8	6	13.3
看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない	非常にそう思う	3	21.4	6	25.0	8	27.6	7	33.3	7	15.6
	ややそう思う	10	71.4	8	33.3	16	55.2	5	23.8	30	66.7
	あまりそう思わない	1	7.1	10	41.7	4	13.8	9	42.9	8	17.8
	全くそう思わない	-	-	-	-	1	3.4	-	-	-	-
日本学会基準との関係性・位置づけが良く分からない	非常にそう思う	1	7.1	5	20.8	8	27.6	6	28.6	5	11.1
	ややそう思う	12	85.7	8	33.3	14	48.3	7	33.3	24	53.3
	あまりそう思わない	1	7.1	11	45.8	5	17.2	7	33.3	14	31.1
	全くそう思わない	-	-	-	-	2	6.9	1	4.8	2	4.4
どう活用したら良いか分からない	非常にそう思う	-	-	2	8.3	1	3.4	1	4.8	2	4.4
	ややそう思う	6	42.9	5	20.8	10	34.5	5	23.8	9	20.0
	あまりそう思わない	7	50.0	16	66.7	13	44.8	13	61.9	29	64.4
	全くそう思わない	1	7.1	1	4.2	5	17.2	2	9.5	5	11.1

表 13 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用計画の開設時期別比較 n=133 校

項目		4年以内		5～9年前		10～14年前		15～19年前		20年以上前	
		n=14		n=24		n=29		n=21		n=45	
		n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
大学全体のカリキュラムに導入 予定である	はい	7	50.0	12	50.0	19	65.5	13	61.9	18	40.0
	いいえ	7	50.0	12	50.0	10	34.5	8	38.1	27	60.0
各領域で活用予定である	はい	7	50.0	14	58.3	20	69.0	14	66.7	28	62.2
	いいえ	7	50.0	10	41.7	9	31.0	7	33.3	17	37.8
各科目（科目担当教員の判断） で活用するように伝達している	はい	7	50.0	11	45.8	21	72.4	15	71.4	26	57.8
	いいえ	7	50.0	13	54.2	8	27.6	6	28.6	19	42.2

表 14 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用に必要な支援や研修の開設時期別比較 n=133 校

項目		4年以内		5～9年前		10～14年前		15～19年前		20年以上前	
		n=14		n=24		n=29		n=21		n=45	
		n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
活用している他大学の 取り組みの紹介・ 情報提供が必要である	非常にそう思う	4	28.6	11	45.8	11	37.9	6	28.6	21	46.7
	ややそう思う	8	57.1	9	37.5	11	37.9	13	61.9	15	33.3
	あまりそう思わない	2	14.3	4	16.7	7	24.1	1	4.8	8	17.8
	全くそう思わない	-	-	-	-	-	-	1	4.8	1	2.2
看護学教育モデル・ コア・カリキュラム との関連性について の説明が必要である	非常にそう思う	6	42.9	11	45.8	12	41.4	7	33.3	26	57.8
	ややそう思う	7	50.0	8	33.3	13	44.8	10	47.6	8	17.8
	あまりそう思わない	1	7.1	5	20.8	4	13.8	4	19.0	9	20.0
	全くそう思わない	-	-	-	-	-	-	-	-	2	4.4
活用するための具体的 な方法の解説が必要 である	非常にそう思う	4	28.6	10	41.7	10	34.5	4	19.0	18	40.0
	ややそう思う	7	50.0	7	29.2	10	34.5	13	61.9	13	28.9
	あまりそう思わない	3	21.4	7	29.2	9	31.0	4	19.0	12	26.7
	全くそう思わない	-	-	-	-	-	-	-	-	2	4.4
活用するための相談 窓口が必要である	非常にそう思う	1	7.1	2	8.3	4	13.8	2	9.5	4	8.9
	ややそう思う	6	42.9	13	54.2	8	27.6	8	38.1	13	28.9
	あまりそう思わない	7	50.0	9	37.5	17	58.6	11	52.4	26	57.8
	全くそう思わない	-	-	-	-	-	-	-	-	2	4.4
自分の大学のカリ キュラムへの導入に 対する支援が必要で ある	非常にそう思う	-	-	1	4.2	1	3.4	-	-	3	6.7
	ややそう思う	4	28.6	11	45.8	7	24.1	5	23.8	10	22.2
	あまりそう思わない	10	71.4	11	45.8	20	69.0	13	61.9	29	64.4
	全くそう思わない	-	-	1	4.2	1	3.4	3	14.3	3	6.7
活用するための教員 の研修会やFD企画の 支援が必要である	非常にそう思う	4	28.6	11	45.8	7	24.1	0	0.0	11	24.4
	ややそう思う	8	57.1	10	41.7	12	41.4	17	81.0	24	53.3
	あまりそう思わない	2	14.3	3	12.5	10	34.5	4	19.0	9	20.0
	全くそう思わない	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1.1

3) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況別比較

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での課題では、「活用している」大学で、「卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては低い」以外は、「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせた割合が「活用方法を検討している」大学、「活用を予定していない」大学よりも全体的に低かった。「活用している」大学で「非常にそう思う」「ややそう思う」割合が最も高かったものは「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない」で約6割であった。「活用方法を検討している」では、「検討するための時間が不足している」の割合が最も高く、「非常にそう思う」「ややそう思う」合わせて93.8%であった。次いで、「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない」が84.6%、「教員への周知が十分でない」は80.0%であった。「活用を予定していない」ところでは、「教員への周知が十分でない」「教員の関心・意識が低い」「検討するための時間が不足している」の「非常にそう思う」「ややそう思う」を合わせた割合が100%であった。「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない」「日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない」についても約9割が「非常にそう思う」「ややそう思う」と回答していた(表15)。

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用のために必要と思われる支援や研修では、「活用している」ところでは、「活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である」「活用するための教員の研修会やFD企画の支援が必要である」「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関連性についての説明が必要である」が、「非常にそう思う」「ややそう思う」の割合が70%以上で高かった。「活用方法を検討している」ところでは、「活用している」と同様の項目に加え、「活用するための具体的な方法の解説が必要である」の割合が高く、いずれも8割以上であった。「活用を予定していない」大学においても、「活用方法を検討している」ところと同様の項目の割合が顕著に高く、情報提供や、説明、解説に関するものはいずれも100%を占めており、ニーズは高かった(表16)。

表 15 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を大学で活用する上での課題の活用状況別比較
n=133校

項目		活用している		活用方法を 検討している		活用を予定 していない	
		n=59		n=65		n=9	
		n	%	n	%	n	%
学士力と本報告書とのつながりが分かりにくい	非常にそう思う	3	5.1	2	3.1	1	11.1
	ややそう思う	18	30.5	35	53.8	6	66.7
	あまりそう思わない	37	62.7	27	41.5	2	22.2
	全くそう思わない	1	1.7	1	1.5	-	-
卒業時の到達目標の抽象度が高い	非常にそう思う	1	1.7	3	4.6	-	-
	ややそう思う	26	44.1	41	63.1	5	55.6
	あまりそう思わない	31	52.5	20	30.8	4	44.4
	全くそう思わない	1	1.7	1	1.5	-	-
卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては高い	非常にそう思う	2	3.4	7	10.8	1	11.1
	ややそう思う	21	35.6	32	49.2	6	66.7
	あまりそう思わない	35	59.3	26	40.0	2	22.2
	全くそう思わない	1	1.7	-	-	-	-
卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては低い	非常にそう思う	-	-	-	-	-	-
	ややそう思う	2	3.4	-	-	-	-
	あまりそう思わない	46	78.0	52	80.0	8	88.9
	全くそう思わない	11	18.6	13	20.0	1	11.1
各到達目標の教育内容の大項目例(カテゴリー名)が分かりにくい	非常にそう思う	-	-	-	-	-	-
	ややそう思う	17	28.8	24	36.9	3	33.3
	あまりそう思わない	39	66.1	35	53.8	5	55.6
	全くそう思わない	3	5.1	6	9.2	1	11.1
教員への周知が十分でない	非常にそう思う	3	5.1	8	12.3	7	77.8
	ややそう思う	27	45.8	44	67.7	2	22.2
	あまりそう思わない	21	35.6	13	20.0	-	-
	全くそう思わない	8	13.6	-	-	-	-
教員の関心・意識が低い	非常にそう思う	-	-	8	12.3	4	44.4
	ややそう思う	29	49.2	42	64.6	5	55.6
	あまりそう思わない	26	44.1	14	21.5	-	-
	全くそう思わない	4	6.8	1	1.5	-	-
検討するための時間が不足している	非常にそう思う	10	16.9	26	40.0	4	44.4
	ややそう思う	24	40.7	35	53.8	5	55.6
	あまりそう思わない	23	39.0	4	6.2	-	-
	全くそう思わない	2	3.4	-	-	-	-
看護学教育モデル・コア・カリキュラムの方が使いやすい	非常にそう思う	3	5.1	1	1.5	5	55.6
	ややそう思う	13	22.0	25	38.5	1	11.1
	あまりそう思わない	35	59.3	34	52.3	2	22.2
	全くそう思わない	8	13.6	5	7.7	1	11.1
看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない	非常にそう思う	9	15.3	18	27.7	4	44.4
	ややそう思う	28	47.5	37	56.9	4	44.4
	あまりそう思わない	21	35.6	10	15.4	1	11.1
	全くそう思わない	1	1.7	-	-	-	-
日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない	非常にそう思う	5	8.5	16	24.6	4	44.4
	ややそう思う	26	44.1	35	53.8	4	44.4
	あまりそう思わない	25	42.4	12	18.5	1	11.1
	全くそう思わない	3	5.1	2	3.1	-	-
どう活用したら良いか分からない	非常にそう思う	-	-	4	6.2	2	22.2
	ややそう思う	11	18.6	19	29.2	5	55.6
	あまりそう思わない	38	64.4	38	58.5	2	22.2
	全くそう思わない	10	16.9	4	6.2	-	-

表 16 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用に必要な支援や研修の活用状況別比較

		活用している				活用方法を検討している		活用を予定していない	
項目		n=59		n=65		n=9			
		n	%	n	%	n	%		
活用している他大学の取 り組みの紹介・情報提供 が必要である	非常にそう思う	22	37.3	25	38.5	6	66.7		
	ややそう思う	23	39.0	30	46.2	3	33.3		
	あまりそう思わない	14	23.7	8	12.3	-	-		
	全くそう思わない	-	-	2	3.1	-	-		
看護学教育モデル・コ ア・カリキュラムとの関 連性についての説明が必要 である	非常にそう思う	20	33.9	33	50.8	9	100.0		
	ややそう思う	22	37.3	24	36.9	-	-		
	あまりそう思わない	16	27.1	7	10.8	-	-		
	全くそう思わない	1	1.7	1	1.5	-	-		
活用するための具体的な 方法の解説が必要である	非常にそう思う	13	22.0	25	38.5	8	88.9		
	ややそう思う	22	37.3	27	41.5	1	11.1		
	あまりそう思わない	23	39.0	12	18.5	-	-		
	全くそう思わない	1	1.7	1	1.5	-	-		
活用するための相談窓口 が必要である	非常にそう思う	5	8.5	6	9.2	2	22.2		
	ややそう思う	20	33.9	25	38.5	3	33.3		
	あまりそう思わない	33	55.9	33	50.8	4	44.4		
	全くそう思わない	1	1.7	1	1.5	-	-		
自分の大学のカリキュラ ムへの導入に対する支援 が必要である	非常にそう思う	4	6.8	1	1.5	-	-		
	ややそう思う	12	20.3	22	33.8	3	33.3		
	あまりそう思わない	40	67.8	37	56.9	6	66.7		
	全くそう思わない	3	5.1	5	7.7	-	-		
活用するための教員の研 修会やFD企画の支援が必要 である	非常にそう思う	14	23.7	15	23.1	4	44.4		
	ややそう思う	30	50.8	37	56.9	4	44.4		
	あまりそう思わない	15	25.4	12	18.5	1	11.1		
	全くそう思わない	-	-	1	1.5	-	-		

B. 看護専門領域責任者による回答

調査 A の対象者から、各大学において異なる看護専門領域の責任者 5 名に調査への回答を依頼する方法をとり、計 439 人(回答率 31.7%)の看護教員から回答を得た。

1. 回答者の概要

回答者の所属大学の設置主体は「国立大学(省庁大学を含む)」97 人(22.1%)、「公立大学」100 人(22.8%)、「私立大学」242 人(55.1%)であった。

職位は、「教授」341 人(77.7%)、「准教授」79 人(18%)、「講師」17 人(3.9%)、「その他」2 人(0.4%)であった。

教員経験年数は、半数以上が 15 年以上で、「15～19 年」122 人(27.8%)、「20 年以上」191 人(43.5%)が多かった。

看護の専門領域は、「基礎看護学」61 人(13.9%)、「母性看護学」60 人(13.7%)、「小児看護学」47 人(10.7%)、「成人看護学」44 人(10%)、「成人急性期看護学」14 人(3.2%)、「成人慢性期看護学」26 人(5.9%)、「老年看護学」51 人(11.6%)、「精神看護学」48 人(9.1%)、「公衆衛生・地域看護学」40 人(9.1%)、「在宅看護学」29 人(6.6%)、「看護教育学」5 人(1.1%)、「看護管理学」8 人(1.8%)、「その他」6 人(1.4%)であった(表 17)。

表 17 回答大学及び回答者の属性(看護専門領域責任者) n=439

項目	人	%	
設置主体	国立大学(省庁大学校を含む)	97	22.1
	公立大学	100	22.8
	私立大学	242	55.1
職位	教授	341	77.7
	准教授	79	18.0
	講師	17	3.9
	その他	2	0.4
教員としての経験年数	4年以内	7	1.6
	5～9年	43	9.8
	10～14年	76	17.3
	15～19年	122	27.8
	20年以上	191	43.5
専門領域	基礎看護学	61	13.9
	母性看護学	60	13.7
	小児看護学	47	10.7
	成人看護学	44	10.0
	成人急性期看護学	14	3.2
	成人慢性期看護学	26	5.9
	老年看護学	51	11.6
	精神看護学	48	10.9
	公衆衛生・地域看護学	40	9.1
	在宅看護学	29	6.6
	看護教育学	5	1.1
	看護管理学	8	1.8
その他	6	1.4	

2. 看護専門領域での「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況

看護専門領域での「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の現在の活用状況は、「活用方法を検討している」248人(56.5%)、「活用している」143人(32.6%)、「活用を予定していない」48人(10.9%)であり、半数以上が活用を検討している段階であると回答した。

1) 「活用している」回答とした者の具体的活用内容（看護専門領域責任者）

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を「活用している」と回答した者のうち138人から具体的な活用方法の内容が挙げられた(複数回答)(表18)。

<シラバス・科目内容の構築や検討に活用>は93件で最も多く、専門領域におけるシラバス作成、科目目標作成への活用や、科目内容の検討に活用されていた。また特に演習・実習に特化して活用している記述も挙げられた。<カリキュラム作成・検討に活用>は30件で、専門領域に関する回答というよりも所属大学でカリキュラム全体の構築、照合に活用しているという回答であった。同様に、<CP・DPの策定に活用>が8件あった。<評価に活用>は21件あり、カリキュラム・教育内容の評価、卒業時や学年ごとの評価、実習・演習の評価等に活用していると回答された。また学生主体・参加型の評価に活用している記述もみられた。

2) 「活用方法を検討している」と回答した者の具体的検討内容（看護専門領域責任者）

「活用方法を検討している」と回答した248人の具体的な検討内容では、「既存のカリキュラムと照合している」が8割以上、「領域独自の目標とすり合わせを行う」は7割以上と多かったが、「他領域と検討している」3割弱、「勉強会を開催している」は2割弱と少なかった(図8)。

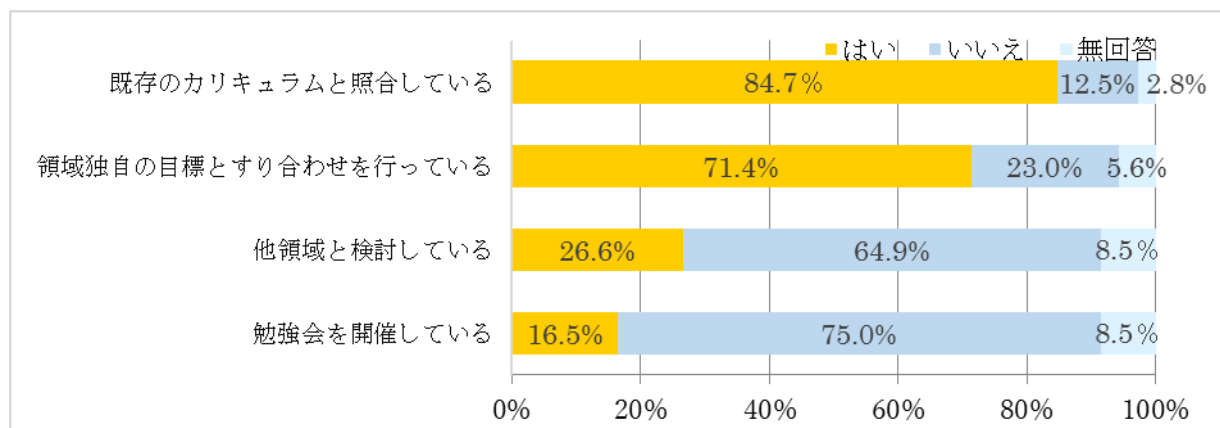


図8 看護専門領域で「活用方法を検討している」場合の具体的内容

「活用方法を検討している」回答者のうち、32名から具体的内容が挙げられた。<カリキュラム検討・活用・すり合わせ>11件、<評価に活用>4件、モデル・コア・カリキュラムなど<他基準等の関連を検討>などが記載された。活用の成果として、実習フィールドを拡大したといった具体例が示された(表19)。

表 18 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を「活用している」回答者の活用方法

(自由記述) (看護専門領域責任者) n=138 人

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容 (例)
シラバス・科目 内容構築・検討 に活用 (93)	シラバス・授業内 容検討構築に活用 (77)	<ul style="list-style-type: none"> ・シラバス作成、講義内容検討時に活用 ・講義の目標や内容に反映させている ・シラバスに学修到達目標として能力を記載 ・担当科目の卒業時到達目標の確認・照合・参考 ・指導案作成時に卒業時到達目標を意識 ・授業内容が必要内容を網羅し、バランスが取れているか確認
	演習・実習内容に 活用(12)	<ul style="list-style-type: none"> ・実習で学生の学修目標設定に用いる ・実習前 OSCE の到達目標・評価項目に活用し、学生に返却する評価表に関連を提示 ・実習で実施可能な看護技術、科目特有の看護技術と到達目標を一覧表にして学生・臨地実習指導者に配布、周知
	展開例記載(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の発達段階に応じた生活の援助を多角的にアセスメントすることをシラバスに明示 ・実習でも生活背景や対象の価値観を含めた個別性のある看護実開を指導 ・地域看護学概論で、地域で展開する看護活動の実践例として、障害児、精神障害児、国際看護活動、地域づくり活動等の現場で活用している方々を招いている
カリキュラム作 成・検討に活用 (30)	カリキュラム検 討・照合 (18)	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム作成にあたり、コアコンピテンシーが網羅されているか比較検討 ・既存のカリキュラムとの照合、授業内容の検討時に活用 ・教育課程検討会で各領域ごとにどこがあてはまるか検討 ・新カリキュラム作成時、教育内容をもとに各領域で不足がないか点検
	カリキュラム構築 (12)	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム構築に活用 ・カリキュラム改正に向け科目概要等の作成に活用 ・専門領域の講義・演習・実習で1～4年を通し、継続的に学ぶことができるようにカリキュラム作成時検討 ・新カリキュラムの改正に向け授業科目の年次配置の検討上到達目標を確認
評価に活用 (21)	教育内容評価に活 用(7)	<ul style="list-style-type: none"> ・教育の到達状況の評価・カリキュラム評価に活用 ・授業内容の点検・評価 ・到達目標をレベル分けして本学の評価マップを作成予定
	学年末・卒業時評 価に活用 (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・学年末に自己評価として実践能力の形成評価を行い、学年進行とともに能力が向上していることを確認 ・卒業時の学生に継続的に調査を行い、領域、学部全体の教育内容に反映
	実習・演習評価に 活用(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・実習・演習での評価項目として採用 ・実習評価項目に入れている ・実習の「学びの振り返り」の冊子を作成し、学生に自己チェックさせ、学生と教員の面接に使っている
	学生主体・参加型 評価に活用(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・学修の到達度を確認するポートフォリオとして活用 ・教員・学生の双方で授業や演習の到達度や状況確認 ・看護学教育で、卒業時到達目標としてどこまでのレベルを求められているかを知り、現時点での自己評価を促す目的で活用
CP・DP 策定に活用 (8)		<ul style="list-style-type: none"> ・DP やルーブリック作成において活用 ・到達目標の設定の際に参考にしている ・卒業時到達目標とコンピテンシーをマトリックス化し、教育内容の充実を図っている ・DP および卒業時のコンピテンシー設定の妥当性を評価するために外的基準として活用 ・CP とコンピテンシーとの関連を確認
FD・学習会に活用 (3)		<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム改訂に向けての勉強会 ・助教レベルでの領域横断的な勉強会の開催 ・教員 FD
その他 (2)		<ul style="list-style-type: none"> ・「看護学概論」で入学時にコアコンピテンシーと基礎看護学領域の授業・単元との関係を説明。学生に卒業時到達目標の既習内容をチェックするように指導している ・調査研究で使用

表 19 「活用方法を検討している」回答者の活用方法（自由記述）（看護専門領域責任者） n=32 人

カテゴリー	具体的内容(例)
カリキュラム検討・活用・すり合わせ (11)	<ul style="list-style-type: none"> ・新カリキュラムに向けて、全体のカリキュラムから領域独自の内容まで検討 (6) ・カリキュラム作成時に活用予定 (2) ・カリキュラムの点検・照合に活用 (2) ・重複を避け効果的なカリキュラムになる工夫
評価に活用(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・実習評価の見直しに活用予定 ・各科目のルーブリック評価との照合 ・卒業時到達度の自己評価の一部に活用し結果を領域の教育内容に活かす ・評価指標として活用
シラバス・科目目標・内容に活用 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・科目の授業構成の参考・シラバスに反映 (2) ・領域の科目到達度の参考 ・学修進度・実習との関係を検討する
他基準等と関連を検討 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護学モデル・コア・カリキュラムとの関係の検討 ・「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準(看護分野)」との関係の検討
コンピテンシーの活用による成果としての教育内容や方法(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床指導者と情報共有に活用 ・看護の統合と実習で修得 ・到達目標に見合う内容にするため実習フィールドを拡大 ・学生が主体的に卒業時到達目標を活用できる方法を模索
その他(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の独自性も配慮 ・保健師教育以外の全員必修科目での達成に必要な関連領域とすり合わせ ・教務分科会で検討

3) 「活用を予定していない」とした理由(看護専門領域責任者)

各看護専門領域で「活用を予定していない」の回答者のうち、37人からその理由の記述があった。＜看護学教育モデル・コア・カリキュラムを活用あるいは活用予定であるため＞(9件)が最も多く、＜学部や大学独自のものがあるため＞(5件)、＜すでに同様のコンピテンシーを組み込んだ教育をしているため＞(4件)等の記述があった(表 20)。

表 20 「活用を予定していない理由」(自由記述)(看護専門領域責任者)

n=37 人

カテゴリー	具体的内容(例)
看護学教育モデル・コア・カリキュラムを活用あるいは活用予定であるため(9)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護学教育モデル・コア・カリキュラムによりカリキュラム改正した ・看護学教育モデル・コア・カリキュラムを使用・活用している(5) ・看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの照合をした ・看護学教育モデル・コア・カリキュラムの導入・検討を予定(2)
すでに同様のコンピテンシーを組み込んだ教育をしているため(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・文科省コンピテンシーと同じだから ・すでに同様のコンピテンシーを含んだ目標を組み込んで教育している ・成人看護学分野はすでにコアコンピテンシーも到達目標も含んでいる ・既に関カリキュラムの中に組み込まれている内容
学部や大学独自のものがあるため(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・大学独自のポリシーがある ・大学独自のコンピテンシーに沿った教育をしている(2) ・独自に工夫した授業展開をしている ・統合分野担当で大学の教育目標に沿って授業内容を検討
検討段階、検討予定であるため(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・活用に向けて議論を開始したばかりのため ・学部全体での調整が必要で、検討段階だから ・今後検討する予定だから
内容・活用方法がわからないため(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・内容の理解不足 ・活用方法がわからない ・あまり周知されていない
大学・領域のカリキュラム改正の方針が明確でないため(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・新カリ移行期間であるため ・大学でカリキュラム改正の方針が明確になっていない ・領域の具体的方針がでない
全てを網羅することは困難であるため(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・到達目標の中に、実習での実施が困難なものが多いため ・保健師課程では、参考するがすべて網羅はできない ・講義時間では全ての内容を網羅できない(重要部分を選択)
考えることができていないため(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の業務に追われているため(2) ・普段考えたこともない ・着任後間もない
その他(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・助産師協議会のコアコンピテンシーを利用しているため ・指定規則の改正が数年以内にあるから ・看護ケアの本質を整理したもの過ぎない

3. 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する場合の課題(看護専門領域責任者)

看護専門領域で「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する場合の課題について回答を得た。「非常にそう思う」と「ややそう思う」の合計で7割を超えて回答されたのは、「検討するための時間が不足している」、「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの関係性・位置づけが良く分からない」、「教員への周知が十分でない」、「日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない」の順に多く、「教員の関心・知識が低い」は6割あった。「卒業時の到達レベルが学士修了時としては低い」の回答は5%と特に少なかったが、「学士修了時としては高い」は約4割が課題ととらえていた(図9)。

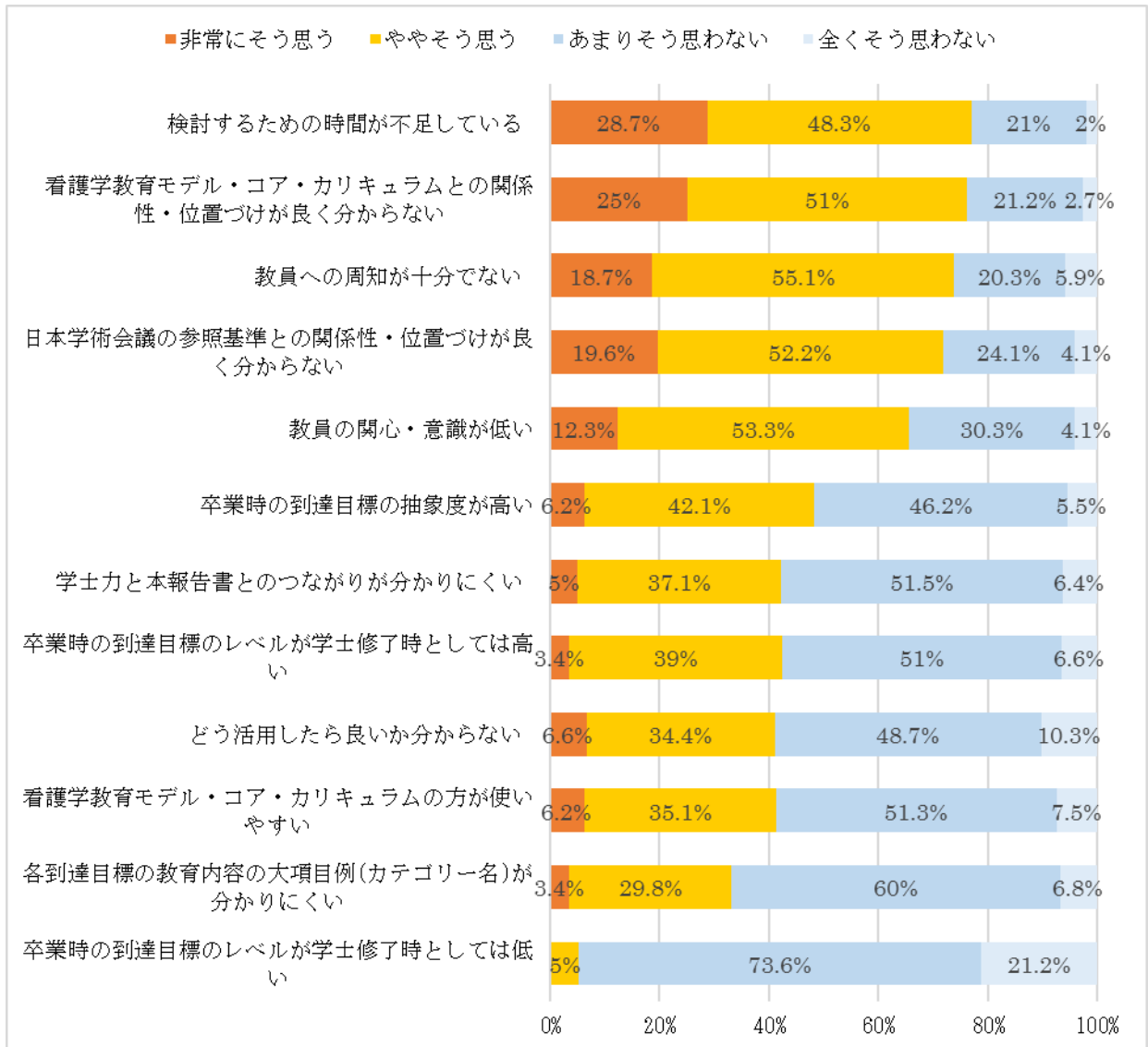


図9 看護専門領域で「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する場合の課題 n=439人

また図9の選択肢以外で活用しにくい理由について自由記述を得た(表21)。最も多かったのは、選択肢にもある<抽象度が高く具体的な到達水準が示されていない>(8人)であった。選択肢にないものとして、<各領域に落とし込むのが困難>、<大学独自のコンピテンシーや保健師課程用の到達目標を利用している>、<内容が細かすぎてコアな内容が出せているか疑問>などの記述があった。

表 21 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用しにくいその他の理由（自由記述）

（看護専門領域責任者） n=35 人

カテゴリー	具体的内容(例)
抽象度が高く、具体的到達水準が示されていない(8)	<ul style="list-style-type: none"> 参考程度であるという曖昧な表現のため抜け道や誤解も生じるため 学年別到達目標の基本線を示してくれると各科目に落とし込みやすい 「～できる」がどの程度かわからず教員の裁量によって実施 活用の具体的情報が得られない(領域毎の活用例を複数提示すべき) 抽象度が高い 卒業時にどのような人に実践できればよいか表現できないものか 抽象度が高く具体性に欠け、到達水準が示されていない 評価しにくい内容が含まれる
類似するものが複数あるため混乱する(7)	<ul style="list-style-type: none"> 類似する内容が複数提示され、それらの優先度がわかりにくい 両者で整合性を検討してほしい 看護学教育モデル・コア・カリキュラムが先に発表されそれを意識して検討した 大学の DP、コアカリキュラム、指定規則と複数あり混乱する 同様のものを複数でなく統一したものを一つ出してほしい 類似のものが複数あり混乱する・活用しにくい(2)
各領域に落とし込むのが困難(7)	<ul style="list-style-type: none"> 精神看護学領域に特化した能力が少ない印象を受けるため 公衆衛生看護学は学習領域が他と異なるが連携の検討が十分でない 卒業時の全体の自己評価としては利用できるが領域の評価は曖昧になる 活用しにくいとまでは思わないが科目特有の技術は独自の検討が必要 教育機関全体で考えるものであり、各領域で最小限押さえる内容ではないことは理解するがそうでないとわかりにくい(精神看護学) 小児看護学に落とし込むのに時間を要している 「地域で生活しながら療養する人と家族を支援する能力」は、精神看護学領域では社会の趨勢によって施設看護と地域看護の両側面において、どのように教授していくのが困難な部分もある
到達目標が高すぎる(6)	<ul style="list-style-type: none"> 講義・演習・実習時間とコアコンピテンシーの内容が整合していない 到達目標は妥当だが私立大学の学生レベルに合わない(高すぎる) 4年間の教育で難しい点がある 卒業時到達目標が非常に高い 実習環境が整わず目標達成が困難である 豊かな社会で育った今の学生にはレベルが高すぎる
内容を十分に検討し、理解する時間がない(4)	<ul style="list-style-type: none"> 教育担当者自体に当該事項に関する認識不足がある 大学教員として着任者が数人おり共通理解の時間がとれない 理解する時間が不足している 領域横断的な内容が多く領域を超えて内容検討する機会が取れない
大学独自・保健師課程用等別の DP を利用(2)	<ul style="list-style-type: none"> 開学当初からの独自のコアコンピテンシーと DP があり、整合性がとりにくい 保健師課程用に作成された卒業時到達目標を利用
内容が細かすぎてコアな内容が出せているか疑問(2)	<ul style="list-style-type: none"> 活用はできるが、教育内容(例)の活用は各大学の独自性で考える部分。提示された内容に縛られる。鵜呑みにする必要はない 内容が細かすぎて、コアな内容が本当に出せているのか検証が必要
その他	<ul style="list-style-type: none"> カリキュラムを改訂し、そのねらいの具体化に取り組んでいる最中で余裕がない 卒業時の目標のレベルが病院(臨床)と乖離しているように思える

4. 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に必要な支援や研修（看護専門領域責任者）

「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性についての説明」が最も必要とされており、「活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供」、「活用するための教員の研修会やFD企画の支援」や「活用するための具体的な方法の解説」も8割前後のニーズがあった。「活用の相談窓口」や「自大学への導入支援」は4割前後で、個別支援というよりも、活用のために他大学の例等から情報を得たり、看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関連を整理したいという内容が多いといえた(図10)。

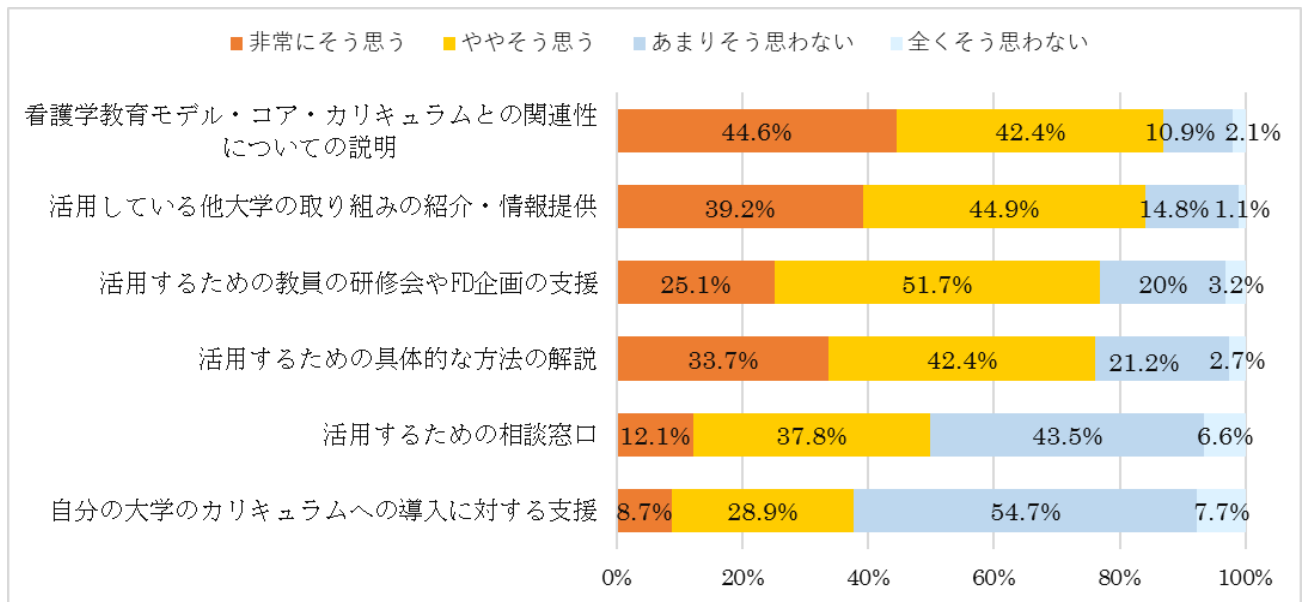


図10 看護専門領域で「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に必要な支援や研修 n=439人

図10の選択肢以外の回答は17件あり、＜地方での意見交換を含む研修会開催を希望する＞(4件)、＜教員に対する教育力向上に関する研修会の開催を希望する＞(4件)、＜看護教育モデル・コア・カリキュラムとの一本化の提示を希望する＞(3件)等であった。

5. 看護専門領域責任者の「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に関わる回答のクロス集計結果

1) 看護専門領域責任者による設置主体別の回答結果

(1) 「コンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況の設置主体別比較

「活用している」は、約3割で設置主体による大きな違いはなかった。「活用方法を検討している」は公立大学(以下「公立」)が私立大学(以下「私立」)、国立大学(以下「国立」)よりも多い結果であった。「活用を予定していない」は国立が16%に比し、公立は5%と最も少なく、違いがみられた。

「活用方法を検討している」回答での具体的方法では、「勉強会を開催」は、私立が2割程度、国立が少なく1割に満たなかった。「他領域と検討」は、大きな違いはなく1/4強が実施していた。「既存のカリキュラムとの照合」は、いずれも8割を超えていたが、特に国立が92%と高かった。「領域独自の目標とすりあわせている」はいずれも7割以上あった。(表22)。

表 22 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況の設置主体別比較（看護専門領域責任者）

項目	n=439 人					
	国立大学 (省庁大学校を含む)		公立大学		私立大学	
	n=97		n=100		n=242	
	n	%	n	%	n	%
「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況						
活用している	33	34.0	33	33.0	77	31.8
活用方法を検討している	49	50.5	62	62.0	137	56.6
活用を予定していない	15	15.5	5	5.0	28	11.6
「活用方法を検討している」場合の具体的内容（「活用方法を検討している」回答者のみ）						
	n=49		n=62		n=137	
勉強会を開催している	3	6.2	9	14.5	29	21.2
他領域と検討している	14	28.6	17	27.4	35	25.5
既存のカリキュラムと照合している	45	91.8	51	82.3	114	83.2
領域独自の目標とすり合わせを行っている	35	71.4	44	71.0	98	71.5

(2) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での課題の設置主体別の比較

設置主体別の回答に違いがみられたのは次のような項目であった。「学士力と本報告書とのつながりが分かりにくい」では、国立の回答が若干多く、公立は少ない傾向があった。「卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては高い」は私立が5割近く、他よりも若干多かった。「教員への周知が十分でない」や「教員の関心・意識が低い」は私立が最も割合が高く、特に「教員への周知が十分でない」ことについて「非常にそう思う」の回答が多かった。新設大学の増加等その背景からの影響が考えられた。「検討するための時間が不足している」は、いずれの設置主体も7割強は「非常にそう思う」「そう思う」に回答しているが、特に私立と国立が「非常にそう思う」の回答割合が多かった。「日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない」は若干公立が低いが、いずれも7割前後が回答していたが、国立は特に公立よりも「非常にそう思う」の回答割合が多かった。「どう活用したら良いか分からない」は、私立、国立が4割、公立が3割で若干の違いがあった（表 23）。活用する上での課題では、新設であり検討への周知や時間を割くことが十分でない大学や、教員人員配置の課題を持つ大学など、大学の背景も影響していることも推測された（表 23）。

表 23 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での課題の設置主体別比較

(看護専門領域責任者) n=439 人

項目	国立大学 (省庁大学校を含む)		公立大学		私立大学		
	n=97		n=100		n=242		
	n	%	n	%	n	%	
学士力と本報告書との つながりが分かりにく い	非常にそう思う	8	8.2	3	3.0	11	4.5
	ややそう思う	35	36.1	31	31.0	97	40.1
	あまりそう思わない	48	49.5	63	63.0	115	47.5
	全くそう思わない	6	6.2	3	3.0	19	7.9
卒業時の到達目標の抽 象度が高い	非常にそう思う	8	8.2	5	5.0	14	5.8
	ややそう思う	32	33	43	43.0	110	45.5
	あまりそう思わない	52	53.6	48	48.0	103	42.6
	全くそう思わない	5	5.2	4	4.0	15	6.2
卒業時の到達目標のレ ベルが学士修了時とし ては高い	非常にそう思う	2	2.1	2	2.0	11	4.5
	ややそう思う	35	36.1	36	36.0	100	41.3
	あまりそう思わない	53	54.6	55	55.0	116	47.9
	全くそう思わない	7	7.2	7	7.0	15	6.2
卒業時の到達目標のレ ベルが学士修了時とし ては低い	非常にそう思う	-	-	-	-	1	0.4
	ややそう思う	5	5.2	6	6.0	11	4.5
	あまりそう思わない	72	74.2	71	71.0	180	74.4
	全くそう思わない	20	20.6	23	23.0	50	20.7
各到達目標の教育内容 の大項目例(カテゴリー 名)が分かりにくい	非常にそう思う	7	7.2	3	3.0	5	2.1
	ややそう思う	26	26.8	26	26.0	79	32.6
	あまりそう思わない	58	59.8	65	65.0	140	57.9
	全くそう思わない	6	6.2	6	6.0	18	7.4
教員への周知が十分で ない	非常にそう思う	15	15.5	11	11.0	56	23.1
	ややそう思う	51	52.6	54	54.0	137	56.6
	あまりそう思わない	24	24.7	28	28.0	37	15.3
	全くそう思わない	7	7.2	7	7.0	12	5.0
教員の関心・意識が低 い	非常にそう思う	13	13.4	4	4.0	37	15.3
	ややそう思う	50	51.5	51	51.0	133	55.0
	あまりそう思わない	30	30.9	39	39.0	64	26.4
	全くそう思わない	4	4.1	6	6.0	8	3.3
検討するための時間が 不足している	非常にそう思う	29	29.9	17	17.0	80	33.1
	ややそう思う	41	42.3	59	59.0	112	46.3
	あまりそう思わない	25	25.8	23	23.0	44	18.2
	全くそう思わない	2	2.1	1	1.0	6	2.5
看護学教育モデル・コ ア・カリキュラムの方 が使いやすい	非常にそう思う	5	5.2	6	6.0	16	6.6
	ややそう思う	43	44.3	31	31.0	80	33.1
	あまりそう思わない	44	45.4	51	51.0	130	53.7
	全くそう思わない	5	5.2	12	12.0	16	6.6
看護学教育モデル・コ ア・カリキュラムとの 関係性・位置づけが良 く分からない	非常にそう思う	24	24.7	21	21.0	65	26.9
	ややそう思う	52	53.6	52	52.0	120	49.6
	あまりそう思わない	17	17.5	24	24.0	52	21.5
	全くそう思わない	4	4.1	3	3.0	5	2.1
日本学術会議の参照基 準との関係性・位置づ けが良く分からない	非常にそう思う	24	24.7	13	13.0	49	20.2
	ややそう思う	45	46.4	55	55.0	129	53.3
	あまりそう思わない	23	23.7	26	26.0	57	23.6
	全くそう思わない	5	5.2	6	6.0	7	2.9
どう活用したら良いか 分からない	非常にそう思う	9	9.3	3	3.0	17	7.0
	ややそう思う	31	32	30	30.0	90	37.2
	あまりそう思わない	45	46.4	57	57.0	112	46.3
	全くそう思わない	12	12.4	10	10.0	23	9.5

(3) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に必要な支援や研修の設置主体別の比較

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に必要な支援や研修において、「非常に思う」と「やや思う」を加えた割合が、国立、公立、私立ともに7割を越えていたのは、「活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である」「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性についての説明が必要である」であった(表24)。またすべての項目において私立のニーズが国立や公立と比べて高く、先の2項目については約9割が支援の必要性をあると回答していた。

表 24 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に必要な支援や研修の設置主体別比較
(看護専門領域責任者)n=439人

項目		国立大学 (省庁大学校を含む) n=97		公立大学 n=100		私立大学 n=242	
		n	%	n	%	n	%
		活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である	非常に思う	29	29.9	31	31.0
	やや思う	42	43.3	50	50.0	105	43.4
	あまりそう思わない	24	24.7	18	18.0	23	9.5
	全くそう思わない	2	2.1	1	1.0	2	0.8
看護学教育モデル・コア・カリキュラム(文部科学省)との関連性についての説明が必要である	非常に思う	40	41.2	35	35.0	121	50.0
	やや思う	36	37.1	53	53.0	97	40.1
	あまりそう思わない	18	18.6	11	11.0	19	7.9
	全くそう思わない	3	3.1	1	1.0	5	2.1
活用するための具体的な方法の解説が必要である	非常に思う	29	29.9	24	24.0	95	39.3
	やや思う	31	32.0	51	51.0	104	43.0
	あまりそう思わない	32	33.0	24	24.0	37	15.3
	全くそう思わない	5	5.2	1	1.0	6	2.5
活用するための相談窓口が必要である	非常に思う	11	11.3	7	7.0	35	14.5
	やや思う	26	26.8	30	30.0	110	45.5
	あまりそう思わない	47	48.5	59	59.0	85	35.1
	全くそう思わない	13	13.4	4	4.0	12	5.0
自分の大学のカリキュラムへの導入に対する支援が必要である	非常に思う	3	3.1	3	3.0	32	13.2
	やや思う	21	21.6	21	21.0	85	35.1
	あまりそう思わない	58	59.8	70	70.0	112	46.3
	全くそう思わない	15	15.5	6	6.0	13	5.4
活用するための教員の研修会やFD企画の支援が必要である	非常に思う	16	16.5	16	16.0	78	32.2
	やや思う	47	48.5	52	52.0	128	52.9
	あまりそう思わない	28	28.9	30	30.0	30	12.4
	全くそう思わない	6	6.2	2	2.0	6	2.5

2) 看護専門領域責任者による職位別の集計結果

(1) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況の職位別の比較

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用を予定していないと回答したのは約 1 割程度であり、多くが「活用方法を検討している」段階であることがわかった。その中でも教授や准教授は 5 割程度なのに対して、講師は 9 割近くが活用方法を検討していると回答していることが特徴的だった。「活用方法を検討している」場合の具体的内容では、「既存のカリキュラムと照合している」が教授・准教授・講師のすべてにおいて 8 割以上を占めていた。また「領域独自の目標とすり合わせを行っている」が教授・講師では 6 割台であるのに対して、准教授において 8 割以上と多い傾向がみられた（表 25）。

表 25 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況の職位別比較(看護専門領域責任者)

n=439 人

項目	教授		准教授		講師		その他	
	n=341		n=79		n=17		n=2	
	n	%	n	%	n	%	n	%
「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況								
活用している	116	34.0	25	31.6	2	11.8	-	-
活用方法を検討している	187	54.8	44	55.7	15	88.2	2	100.0
活用を予定していない	38	11.1	10	12.7	0	0.0	-	-
「活用方法を検討している」場合の具体的内容(「活用方法を検討している」回答者のみ)								
	n=187		n=44		n=15		n=2	
勉強会を開催している	31	16.6	7	15.9	3	20.0	-	-
他領域と検討している	47	25.1	15	34.1	4	26.7	-	-
既存のカリキュラムと照合している	158	84.5	39	88.6	13	86.7	-	-
領域独自の目標とすり合わせを行っている	129	69.0	37	84.1	10	66.7	1	50.0

(2) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での課題の職位別比較

教授は「教員への周知が十分でない」「検討するための時間が不足している」「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの関係性・位置づけが良く分からない」「日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない」において「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合わせた割合が 7 割を越えており、中でも「検討するための時間が不足している」が 76%と最も多かった。

准教授の約 8 割、講師の 9 割以上が課題であると回答したのは「教員への周知が十分でない」であり、これが最も大きな課題と考えていることがわかる。それ以外で准教授の 7 割以上が課題であると回答したのは、「教員の関心・意識が低い」「検討するための時間が不足している」「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの関係性・位置づけが良く分からない」「日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない」であった。講師では「検討するための時間が不足している」も 9 割以上が課題であると考えており、7 割以上だったのは、「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの関係性・位置づけが良く分からない」「日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない」であった（表 26）。

表 26 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での課題の職位別比較

(看護専門領域責任者) n=439 人

項目		教授 n=341		准教授 n=79		講師 n=17		その他 n=2	
		n	%	n	%	n	%	n	%
学士力と本報告書とのつながりが分かりにくい	非常にそう思う	19	5.6	3	3.8	-	-	-	-
	ややそう思う	121	35.5	34	43.0	6	35.3	2	100.0
	あまりそう思わない	177	51.9	39	49.4	10	58.9	-	-
	全くそう思わない	24	7.0	3	3.8	1	5.9	-	-
卒業時の到達目標の抽象度が高い	非常にそう思う	25	7.3	1	1.3	1	5.9	-	-
	ややそう思う	139	40.8	36	45.6	8	47.1	2	100.0
	あまりそう思わない	157	46.0	38	48.1	8	47.1	-	-
	全くそう思わない	20	5.9	4	5.1	-	-	-	-
卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては高い	非常にそう思う	11	3.2	4	5.1	-	-	-	-
	ややそう思う	136	39.9	25	31.6	8	47.1	2	100.0
	あまりそう思わない	173	50.7	43	54.4	8	47.1	-	-
	全くそう思わない	21	6.2	7	8.9	1	5.9	-	-
卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては低い	非常にそう思う	1	0.3	-	-	-	-	-	-
	ややそう思う	17	5.0	4	5.1	1	5.9	-	-
	あまりそう思わない	253	74.2	55	69.6	13	76.5	2	100.0
	全くそう思わない	70	20.5	20	25.3	3	17.6	-	-
各到達目標の教育内容の大項目例(カテゴリー名)が分かりにくい	非常にそう思う	14	4.1	1	1.3	-	-	-	-
	ややそう思う	98	28.7	25	31.6	7	41.2	1	50.0
	あまりそう思わない	208	61.0	46	58.2	8	47.1	1	50.0
	全くそう思わない	21	6.2	7	8.9	2	11.8	-	-
教員への周知が十分でない	非常にそう思う	60	17.6	16	20.3	5	29.4	1	50.0
	ややそう思う	182	53.4	48	60.8	11	64.7	1	50.0
	あまりそう思わない	78	22.9	10	12.7	1	5.9	-	-
	全くそう思わない	21	6.2	5	6.3	-	-	-	-
教員の関心・意識が低い	非常にそう思う	45	13.2	8	10.1	1	5.9	-	-
	ややそう思う	174	51.0	50	63.3	8	47.1	2	100.0
	あまりそう思わない	108	31.7	17	21.5	8	47.1	-	-
	全くそう思わない	14	4.1	4	5.1	-	-	-	-
検討するための時間が不足している	非常にそう思う	97	28.4	22	27.8	6	35.3	1	50.0
	ややそう思う	163	47.8	38	48.1	10	58.9	1	50.0
	あまりそう思わない	74	21.7	17	21.5	1	5.9	-	-
	全くそう思わない	7	2.1	2	2.5	-	-	-	-
看護学教育モデル・コア・カリキュラムの方が使いやすい	非常にそう思う	23	6.7	4	5.1	-	-	-	-
	ややそう思う	116	34.0	32	40.5	5	29.4	1	50.0
	あまりそう思わない	175	51.3	38	48.1	11	64.7	1	50.0
	全くそう思わない	27	7.9	5	6.3	1	5.9	-	-
看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分からない	非常にそう思う	85	24.9	21	26.6	3	17.6	1	50.0
	ややそう思う	171	50.1	43	54.4	10	58.8	-	-
	あまりそう思わない	77	22.6	12	15.2	3	17.6	1	50.0
	全くそう思わない	8	2.3	3	3.8	1	5.9	-	-
日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない	非常にそう思う	73	21.4	9	11.4	3	17.6	1	50.0
	ややそう思う	169	49.6	50	63.3	9	52.9	1	50.0
	あまりそう思わない	85	24.9	17	21.5	4	23.5	-	-
	全くそう思わない	14	4.1	3	3.8	1	5.9	-	-
どう活用したら良いか分からない	非常にそう思う	23	6.7	4	5.1	1	5.9	1	50.0
	ややそう思う	104	30.5	41	51.9	5	29.4	1	50.0
	あまりそう思わない	177	51.9	28	35.4	9	52.9	-	-
	全くそう思わない	37	10.9	6	7.6	2	11.8	-	-

(3) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に必要な支援や研修の職位別比較

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に必要な支援や研修について、「非常に思う」と「やや思う」を加えた割合が、教授・准教授・講師ともに8割を越えていたのは、「活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である」「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性についての説明が必要である」の2項目であった(表27)。

なかでも全般的に講師が支援や研修の必要性を強く感じており、「活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である」「活用するための具体的な方法の解説が必要である」においては9割以上が、「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性についての説明が必要である」については講師の回答者全員が必要であると認識していた。

表27 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に必要な支援や研修の職位別比較

(看護専門領域責任者) n=439人

項目		教授 n=341		准教授 n=79		講師 n=17		その他 n=2	
		n	%	n	%	n	%	n	%
活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である	非常に思う	126	37.0	37	46.8	8	47.1	1	50.0
	やや思う	154	45.2	34	43.0	8	47.1	1	50.0
	あまりそう思わない	59	17.3	5	6.3	1	5.9	-	-
	全くそう思わない	2	0.6	3	3.8	-	-	-	-
看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関連性についての説明が必要である	非常に思う	146	42.8	41	51.9	8	47.1	1	50.0
	やや思う	143	41.9	33	41.8	9	52.9	1	50.0
	あまりそう思わない	45	13.2	3	3.8	-	-	-	-
	全くそう思わない	7	2.1	2	2.5	-	-	-	-
活用するための具体的な方法の解説が必要である	非常に思う	102	30.0	34	43.0	11	64.7	1	50.0
	やや思う	149	43.7	31	39.2	5	29.4	1	50.0
	あまりそう思わない	81	23.8	12	15.2	-	-	-	-
	全くそう思わない	9	2.6	2	2.5	1	5.9	-	-
活用するための相談窓口が必要である	非常に思う	39	11.4	10	12.7	4	23.5	-	-
	やや思う	118	34.6	39	49.4	8	47.1	1	50.0
	あまりそう思わない	159	46.6	26	32.9	5	29.4	1	50.0
	全くそう思わない	25	7.3	4	5.1	-	-	-	-
自分の大学のカリキュラムへの導入に対する支援が必要である	非常に思う	29	8.5	7	8.9	2	11.8	-	-
	やや思う	89	26.1	27	34.2	9	52.9	2	100.0
	あまりそう思わない	194	56.9	41	51.9	5	29.4	-	-
	全くそう思わない	29	8.5	4	5.1	1	5.9	-	-
活用するための教員の研修会やFD企画の支援が必要である	非常に思う	86	25.2	17	21.5	6	35.3	1	50.0
	やや思う	165	48.4	53	67.1	8	47.1	1	50.0
	あまりそう思わない	78	22.9	7	8.9	3	17.6	-	-
	全くそう思わない	12	3.5	2	2.5	-	-	-	-

3) 看護専門領域責任者による専門領域別の集計結果

(1) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況の専門領域別比較

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の看護専門領域別の活用状況は、表28に示す通りであった。活用割合は「看護管理学」が75%と最も高かったが、「看護管理学」と「看護教育学」の回答者数が少ないことから、10名以上の回答があった領域について述べる。

活用割合が最も高かったのは「成人慢性期看護学」が4割以上で、以下「基礎看護学」「小児看護学」「精神看護学」「成人看護学」「老年看護学」が3割台であった。また活用を予定していない

と回答した割合が最も多いのは「成人急性期看護学」の21.4%で、以下「公衆衛生・地域看護学」20.0%であった。ただし「公衆衛生・地域看護学」が活用を予定していないと回答した割合が多いのは、保健師の教育課程との関係がある可能性が示唆される。また「成人急性期看護学」は回答者数が14名と少ないため、全体を反映したものかは不明である。

「活用方法を検討している」場合の具体的な検討内容では、「既存のカリキュラムと照合している」のは「成人看護学」「在宅看護学」が9割以上、「基礎看護学」「母性看護学」「公衆衛生・地域看護学」「精神看護学」「小児看護学」が8割以上であった。「領域独自の目標とすり合わせを行っている」は「精神看護学」「在宅看護学」が8割以上であった。「他領域と検討している」「勉強会を開催している」は、全般的には2割から3割程度で、それほど多くなかった。

表 28 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況別比較（看護専門領域責任者）n=248人

項目	基礎看護学		母性看護学		小児看護学		成人看護学		成人急性期看護学		成人慢性期看護学		老年看護学		精神看護学		公衆衛生・地域看護学		在宅看護学		看護教育学		看護管理学		その他		
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	
現在の活用状況																											
活用している	24	39.3	17	28.3	17	36.2	15	34.1	2	14.3	11	42.3	16	31.4	17	35.4	10	25.0	6	20.7	1	20.0	6	75.0	1	16.7	
活用方法を検討している	32	52.5	38	63.3	27	57.4	22	50.0	9	64.3	12	46.2	30	58.8	27	56.3	22	55.0	21	72.4	3	60.0	1	12.5	4	66.7	
活用を予定していない	5	8.2	5	8.3	3	6.4	7	15.9	3	21.4	3	11.5	5	9.8	4	8.3	8	20.0	2	6.9	1	20.0	1	12.5	1	16.7	
「活用方法を検討している」場合の具体的な内容（上記の「活用方法を検討している」回答者のみ）																											
	n=32		n=38		n=27		n=22		n=9		n=12		n=30		n=27		n=22		n=21		n=3		n=1		n=4		
勉強会を開催している	6	18.8	4	10.5	5	18.5	4	18.2	2	22.2	1	8.3	2	6.7	3	11.1	7	31.8	5	23.8	·	·	·	·	·	2	60.0
他領域と検討している	8	25.0	11	28.9	9	33.3	1	4.5	5	55.6	3	25.0	6	20.0	7	25.9	7	31.8	5	23.8	1	33.3	·	·	·	3	75.0
既存のカリキュラムと照合している	28	87.5	33	86.8	23	85.2	21	95.5	7	77.8	8	66.7	22	73.3	23	85.2	19	86.4	19	90.5	2	66.7	1	100.0	4	100.0	
領域独自の目標とすり合わせを行っている	17	53.1	30	78.9	20	74.1	15	68.2	6	66.7	7	58.3	19	63.3	23	85.2	16	72.7	17	81.0	1	33.3	1	100.0	4	100.0	

(2) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での課題の専門領域別比較

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での看護専門領域別の課題は、表 29 に示した。「学士力と本報告書とのつながりが分かりにくい」は精神看護学では6割以上、公衆衛生・地域看護学・成人慢性期看護学では4割以上であった。「卒業時の到達目標の抽象度が高い」は精神看護学・看護教育学共に6割以上であった。「各到達目標の教育内容の大項目例(カテゴリー名)が分かりにくい」は成人慢性期看護学・精神看護学において4割以上であった。

「教員への周知が十分でない」は小児看護学8割以上、精神看護学・在宅看護学が7割以上と高かった。「教員の関心・意識が低い」は公衆衛生・地域看護学及び在宅看護学が7割以上と高かった。また、「検討するための時間が不足している」は成人看護学・成人急性期看護学・精神看護学・在宅看護学が8割以上であった。

「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの方が使いやすい」は母性看護学・成人急性期看護学が5割以上であった。「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの関係性・位置づけが良く分からない」は小児看護学・老年看護学が8割以上であった。「日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分からない」は精神看護学・小児看護学・在宅看護学が7割以上であった。

表29 「コアコンピタンスと卒業時到達目標」を看護専門領域で活用する上での課題(看護専門領域別)

項目	基礎看護学		母性看護学		小児看護学		成人看護学		成人急性期看護学		成人慢性期看護学		老年看護学		精神看護学		公衆衛生・地域看護学		在宅看護学		看護教育学		看護管理学		その他		
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	
学生力と本報告書とのつながりが分りにくい	5	8.2	-	-	2	4.3	4	9.1	2	14.3	3	11.5	1	2	2	4.2	2	5.0	-	-	-	-	1	12.5	-	-	
	17	27.9	26	43.3	15	31.9	14	31.8	2	14.3	9	34.6	20	39.2	28	58.3	17	42.5	6	20.7	2	40.0	2	25.0	5	83.3	
	34	55.7	31	51.7	27	57.4	20	45.5	10	71.4	13	50	27	52.9	13	27.1	19	47.5	23	79.3	3	60.0	5	62.5	1	16.7	
	5	8.2	3	5	3	6.4	6	13.6	-	-	1	3.8	3	5.9	5	10.4	2	5.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
卒業時の到達目標の抽象度が高い	5	8.2	3	5	3	6.4	4	9.1	-	-	1	3.8	4	7.8	5	10.4	-	-	2	6.9	-	-	-	-	-	-	
	24	39.3	23	38.3	21	44.7	20	45.5	8	57.1	12	46.2	17	33.3	24	50	18	45.0	8	27.6	3	60.0	3	37.5	4	66.7	
	29	47.5	32	53.3	21	44.7	16	36.4	6	42.9	12	46.2	27	52.9	14	29.2	19	47.5	18	62.1	2	40.0	5	62.5	2	33.3	
	3	4.9	2	3.3	2	4.3	4	9.1	-	-	1	3.8	3	5.9	5	10.4	3	7.5	1	3.4	-	-	-	-	-	-	
卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては高い	1	1.6	1	1.7	2	4.3	2	4.5	1	7.1	-	-	2	3.9	2	4.2	1	2.5	3	10.3	-	-	-	-	-	-	
	23	37.7	23	38.3	16	34	17	38.6	2	14.3	8	30.8	25	49	21	43.8	14	35.0	15	51.7	4	80.0	3	37.5	-	-	
	32	52.5	35	58.3	27	57.4	20	45.5	11	78.6	16	61.5	22	43.1	20	41.7	22	55.0	9	31	1	20.0	3	37.5	6	100.0	
	5	8.2	1	1.7	2	4.3	5	11.4	-	-	2	7.7	2	3.9	5	10.4	3	7.5	2	6.9	-	-	2	25	-	-	
卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては低い	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	12.5	-	-
	2	3.3	3	5	3	6.4	4	9.1	-	-	2	7.7	-	-	3	6.3	3	7.5	1	3.4	-	-	0	0.0	1	16.7	
	45	73.8	45	75	33	70.2	29	65.9	11	78.6	15	57.7	41	80.4	35	72.9	30	75.0	24	82.8	5	100.0	5	62.5	5	83.3	
	14	23	12	20	11	23.4	11	25	3	21.4	9	34.6	10	19.6	10	20.8	7	17.5	4	13.8	-	-	2	25	-	-	
各到達目標の教育内容の大部分(例:テゴリ一名)が分りにくい	2	3.3	2	3.3	-	-	2	4.5	-	-	1	3.8	3	5.9	3	6.3	-	-	-	-	-	-	1	12.5	1	16.7	
	18	29.5	18	30	13	27.7	10	22.7	3	21.4	11	42.3	18	35.3	18	37.5	10	25.0	9	31	1	20.0	2	25.0	-	-	
	34	55.7	39	65	33	70.2	27	61.4	11	78.6	12	46.2	28	54.9	21	43.8	28	70.0	18	62.1	3	60.0	4	50	5	83.3	
	7	11.5	1	1.7	1	2.1	5	11.4	-	-	2	7.7	2	3.9	6	12.5	2	5.0	2	6.9	1	20.0	1	12.5	-	-	
教員への周知が十分でない	10	16.4	10	16.7	7	14.9	9	20.5	3	21.4	4	15.4	11	21.6	14	29.2	5	12.5	5	17.2	-	-	2	25.0	2	33.3	
	36	59	35	58.3	31	66	24	54.5	6	42.9	13	50	24	47.1	24	50	22	55.0	18	62.1	3	60.0	4	50.0	2	33.3	
	9	14.8	12	20	7	14.9	8	18.2	5	35.7	8	30.8	12	23.5	8	16.7	9	22.5	5	17.2	2	40.0	2	25	2	33.3	
	6	9.8	3	5	2	4.3	3	6.8	-	-	1	3.8	4	7.8	2	4.2	4	10.0	1	3.4	-	-	-	-	-	-	

続く

表29 続き

n=439人

項目	基礎看護学		母性看護学		小児看護学		成人看護学		成人看護学		成人看護学		成人看護学		成人看護学		成人看護学		成人看護学		在宅看護学		看護教育学		看護管理学		その他	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
教員の関心・意識が低い ややそう思う あまりそう思わない 全くそう思わない	7	11.5	8	13.3	4	8.5	8	18.2	2	14.3	2	7.7	6	11.8	7	14.6	5	12.5	2	6.9	2	6.9	-	-	2	25.0	1	16.7
	34	55.7	31	51.7	26	55.3	19	43.2	6	42.9	15	57.7	27	52.9	26	54.2	24	60.0	19	65.5	2	40.0	2	40.0	2	25.0	3	50
	16	26.2	19	31.7	15	31.9	15	34.1	6	42.9	8	30.8	17	33.3	13	27.1	9	22.5	7	24.1	2	40.0	4	50	2	33.3	-	-
	4	6.6	2	3.3	2	4.3	2	4.5	-	-	1	3.8	1	2	2	4.2	2	5.0	1	3.4	1	20.0	-	-	-	-	-	-
検討するための時間が不足 している ややそう思う あまりそう思わない 全くそう思わない	15	24.6	12	20	16	34	15	34.1	5	35.7	9	34.6	14	27.5	16	33.3	11	27.5	9	31	1	20.0	1	12.5	2	33.3	-	-
	28	45.9	36	60	19	40.4	23	52.3	7	50	8	30.8	24	47.1	24	50	18	45.0	15	51.7	3	60.0	4	50.0	3	50	-	-
	16	26.2	12	20	10	21.3	5	11.4	2	14.3	8	30.8	12	23.5	7	14.6	10	25.0	5	17.2	1	20.0	3	37.5	1	16.7	-	-
	2	3.3	-	2	4.3	1	2.3	-	-	1	3.8	1	2	2	1	2	2	1	2.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
看護学教育モデル・コア・カリキュラムの方が使いやすい ややそう思う あまりそう思わない 全くそう思わない	7	11.5	2	3.3	2	4.3	3	6.8	-	-	2	7.7	7	13.7	-	-	1	2.5	1	3.4	1	20.0	1	12.5	-	-	-	-
	22	36.1	30	50	16	34	12	27.3	7	50	2	7.7	18	35.3	15	31.3	18	45.0	11	37.9	-	-	-	-	3	50	-	-
	27	44.3	26	43.3	24	51.1	23	52.3	6	42.9	19	73.1	25	49	29	60.4	19	47.5	16	55.2	2	40.0	6	75	3	50	-	-
	5	8.2	2	3.3	5	10.6	6	13.6	1	7.1	3	11.5	1	2	4	8.3	2	5.0	1	3.4	2	40.0	1	12.5	-	-	-	-
看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性・位置づけが良く分らない	24	39.3	13	21.7	12	25.5	11	25	5	35.7	4	15.4	13	25.5	9	18.8	11	27.5	3	10.3	1	20.0	2	25.0	2	33.3	-	-
	23	37.7	33	55	27	57.4	22	50	5	35.7	14	53.8	28	54.9	24	50	22	55.0	15	51.7	2	40.0	5	62.5	4	66.7	-	-
	14	23	13	21.7	8	17	8	18.2	4	28.6	7	26.9	8	15.7	12	25	6	15.0	11	37.9	1	20.0	1	12.5	-	-	-	-
	-	-	1	1.7	-	-	3	6.8	-	-	1	3.8	2	4	3	6.3	1	2.5	-	-	1	20.0	-	-	-	-	-	-
日本学術会議の参照基準との関係性・位置づけが良く分らない	16	26.2	6	10	11	23.4	9	20.5	5	35.7	4	15.4	13	25.5	9	18.8	4	10.0	5	17.2	-	-	2	25.0	2	33.3	-	-
	28	45.9	38	63.3	26	55.3	23	52.3	4	28.6	9	34.6	25	49	29	60.4	22	55.0	17	58.6	1	20.0	3	37.5	4	66.7	-	-
	15	24.6	15	25	10	21.3	9	20.5	5	35.7	11	42.3	9	17.6	8	16.7	13	32.5	6	20.7	2	40.0	3	37.5	-	-	-	-
	2	3.3	1	1.7	-	-	3	6.8	-	-	2	7.7	4	7.8	2	4.2	1	2.5	1	3.4	2	40.0	-	-	-	-	-	-
どう活用したら良いか分からない	8	13.1	-	-	3	6.4	3	6.8	1	7.1	1	3.8	6	11.8	1	2.1	2	5.0	1	3.4	-	-	2	25.0	1	16.7	-	-
	16	26.2	24	40	16	34	15	34.1	6	42.9	8	30.8	17	33.3	19	39.6	16	40.0	9	31	1	20.0	1	12.5	3	50	-	-
	29	47.5	33	55	23	48.9	18	40.9	7	50	14	53.8	22	43.1	25	52.1	20	50.0	16	55.2	3	60.0	3	37.5	1	16.7	-	-
	8	13.1	3	5	5	10.6	8	18.2	-	-	3	11.5	6	11.8	3	6.3	2	5.0	3	10.3	1	20.0	2	25	1	16.7	-	-

(3) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での支援や研修の希望の専門領域別比較

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用する上での支援や研修の希望を専門領域別にみると、精神看護学では「活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である」が9割以上と高く、看護管理学では「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関係性についての説明が必要である」が高く、在宅看護学と看護教育学が共に約8割で「活用するための具体的な方法の解説が必要である」とし、活用するための相談窓口やカリキュラムへの導入に対する支援、研修会やFD企画の支援等に対し、精神看護学、在宅看護学、看護教育学、看護管理学からのニーズが高いようであった（表30）。

表30 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用支援や研修の専門領域別希望

(看護専門領域責任者) n=439人

項目		基礎看護学		母性看護学		小児看護学		成人看護学		成人急性期看護学		成人慢性期看護学		老年看護学		精神看護学		公衆衛生・地域看護学		在宅看護学		看護教育学		看護管理学		その他			
		n=61		n=60		n=47		n=44		n=14		n=26		n=51		n=48		n=40		n=29		n=5		n=8		n=6			
		n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である	非常にそう思う	24	39.3	21	35.0	14	29.8	18	40.9	3	21.4	10	38.5	21	41.2	27	56.3	14	35.0	14	48.3	1	20.0	3	37.5	2	33.3		
	ややそう思う	29	47.5	32	53.3	27	57.4	17	38.6	5	35.7	12	46.2	21	41.2	17	35.4	17	42.5	12	41.4	3	60.0	2	25.0	3	50.0		
	あまりそう思わない	7	11.5	7	11.7	6	12.8	9	20.5	6	42.9	3	11.5	8	15.7	4	8.3	8	20.0	3	10.3	.	.	3	37.5	1	16.7		
	全くそう思わない	1	1.6	1	3.8	1	2.0	.	.	1	2.5	.	.	1	20.0		
看護学教育モデル・コア・カリキュラム(文部科学省)との関係性についての説明が必要である	非常にそう思う	32	52.5	22	36.7	18	38.3	20	45.5	8	57.1	9	34.6	27	52.9	22	45.8	17	42.5	13	44.8	2	40.0	3	37.5	3	50.0		
	ややそう思う	18	29.5	28	46.7	24	51.1	20	45.5	5	35.7	12	46.2	17	33.3	23	47.9	16	40.0	14	48.3	2	40.0	5	62.5	2	33.3		
	あまりそう思わない	9	14.8	10	16.7	5	10.6	2	4.5	1	7.1	4	15.4	6	11.8	3	6.3	6	15.0	1	3.4	1	16.7		
	全くそう思わない	2	3.3	2	4.5	.	.	1	3.8	1	2.0	.	.	1	2.5	1	3.4	1	20.0		
活用するための具体的な方法の解説が必要である	非常にそう思う	23	37.7	16	26.7	13	27.7	17	38.6	5	35.7	9	34.6	15	29.4	22	45.8	14	35.0	9	31.0	.	.	2	25.0	3	50.0		
	ややそう思う	22	36.1	29	48.3	24	51.1	16	36.4	6	42.9	10	38.5	21	41.2	19	39.6	14	35.0	15	51.7	4	80.0	3	37.5	3	50.0		
	あまりそう思わない	14	23.0	15	25.0	9	19.1	9	20.5	3	21.4	6	23.1	13	25.5	7	14.6	11	27.5	3	10.3	.	.	3	37.5	.	.		
	全くそう思わない	2	3.3	.	.	1	2.1	2	4.5	.	.	1	3.8	2	3.9	.	.	1	2.5	2	6.9	1	20.0		
活用するための相談窓口が必要である	非常にそう思う	7	11.5	7	11.7	3	6.4	5	11.4	4	28.6	3	11.5	6	11.8	8	16.7	4	10.0	5	17.2	1	16.7		
	ややそう思う	24	39.3	17	28.3	16	34	18	40.9	3	21.4	12	46.2	20	39.2	23	47.9	15	37.5	10	34.4	2	40.0	2	25.0	4	66.7		
	あまりそう思わない	25	41.0	34	56.7	25	53.2	19	43.2	7	50.0	10	38.5	19	37.3	14	29.2	15	37.5	14	48.3	2	40.0	6	75.0	1	16.7		
	全くそう思わない	5	8.2	2	3.3	3	6.4	2	4.5	0	0.0	1	3.8	6	11.8	3	6.3	6	15.0	.	.	1	20.0		
自分の大学のカリキュラムへの導入に対する支援が必要である	非常にそう思う	5	8.2	1	1.7	2	4.3	5	11.4	2	14.3	4	15.4	9	17.6	4	8.3	2	5.0	4	13.8		
	ややそう思う	17	27.9	19	31.7	13	27.7	16	36.4	3	21.4	8	30.8	13	25.5	20	41.7	7	17.5	8	27.6	.	.	2	25.0	1	16.7		
	あまりそう思わない	35	57.4	40	66.7	30	63.8	18	40.9	9	64.3	12	46.2	23	45.1	19	39.6	24	60.0	16	55.2	3	60.0	6	75.0	5	83.3		
	全くそう思わない	4	6.6	.	.	2	4.3	5	11.4	.	.	2	7.7	6	11.8	5	10.4	7	17.5	1	3.4	2	40.0		
活用するための教員の研修会やFD企画の支援が必要である	非常にそう思う	16	26.2	11	18.3	11	23.4	11	25.0	3	21.4	8	30.8	13	25.5	17	35.4	9	22.5	7	24.1	.	.	3	37.5	1	16.7		
	ややそう思う	25	41.0	40	66.7	28	59.6	25	56.8	7	50.0	11	42.3	19	37.3	27	56.3	20	50.0	15	51.7	4	80.0	3	37.5	3	50.0		
	あまりそう思わない	17	27.9	9	15.0	7	14.9	5	11.4	4	28.6	6	23.1	17	33.3	3	6.3	8	20.0	7	24.1	1	20.0	2	25.0	2	33.3		
	全くそう思わない	3	4.9	.	.	1	2.1	3	6.8	.	.	1	3.8	2	3.9	1	2.1	3	7.5		

6. 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用についての意見(看護専門領域責任者)

「コアコンピテンシーと卒業到達目標」の活用についての自由記述においては、「看護教育モデル・コア・カリキュラムとの一本化を明示した方が良い」、「研修会開催を希望する」、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標は活用しやすい」、「様々な方針を活用し各大学が看護教育を行う必要がある」、等の意見があった(表 31)。

表 31 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」活用への自由記述(看護専門領域責任者) n=20 人

カテゴリー	具体的内容(例)
活用説明を希望する(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 活用例紹介の研修を希望する ・ 説明動画があると活用しやすい
「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」との関連を明示する(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」との相違点を明確にする ・ 「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」と一本化できると良い ・ 「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」と共同した活用例を示されると良い
大学による活用状況の差への懸念がある(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大学間での活用に差が生じることが懸念される ・ 大学の偏差値により達成度が異なっても良いのか迷いがある
「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」は到達目標が示され活用しやすい(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 卒業到達目標が明記されていることはディプロマポリシーとの関連づけやすい ・ 抽象度が高く柔軟に活用できる
「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」以外の指針との整合性について検討を求む(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な看護学教育に関する方針の整合性があまりなく活用が難しい ・ 保健師教育のモデル・コア・カリとの整合性についても検討が必要である
その他(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 紹介という研修会は推奨事例と捉えられる危惧がある ・ 自校の主体性が大事なのでチェック機構だけあればよい

IV. 考察

1. 大学の看護学教育における「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」活用への課題について

本調査の結果、看護学教育責任者の多くは、現在、カリキュラムを改訂する際に参考しているものとして、「保健師助産師看護師学校養成指定規則」（厚生労働省）、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」（日本看護系大学協議会）、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」（文部科学省）をほとんどの大学で挙げていた。このことは、カリキュラムを検討する際の外部指針として周知されていることを示すと推察される。

当協議会の「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用を予定していない大学では、自由記述において、「モデル・コア・カリキュラムや日本学術会議の指針等との違いがわからない」、「他の指針との整合性がわからない」「モデル・コア・カリキュラムを使う予定」等が挙げられていた。このことは、現在、公表されている指針の目的や特徴についての情報提供を行い、それぞれの活用方法の理解が深められていくことで、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の有効活用に向けた理解が深まることが推察された。

本調査の結果から、顕著とまでは言えないものの、大学の設置主体や、開設時期等の背景の違いで、活用状況に差がある項目も見受けられた。背景が異なる大学間で、情報共有や活用の方向性を共有する機会を持つことで、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」と他の外部指針との関係性の整理や、具体的な活用方法のイメージにつながるものと推察された。

看護学教育責任者、および看護専門領域責任者とも、各大学のカリキュラムをディプロマポリシー（DP）・カリキュラムポリシー（CP）との整合性を踏まえて検討を行っているとした回答が多く、今後「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」とこれらのポリシーとの関係性を各大学で明確化する作業が必要である。一方で、すでに、大学・学部・学科・専攻全体の教育について各専門領域でも領域独自の目標へのすり合わせを行うという活用方法が71.4%と高く、その具体的な方法は他領域と検討している」26.6%、「勉強会の開催」16.5%などが上位であった。本調査が「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」が公表されて半年後という時期であったため、これらの回答は、各大学として内容を吟味している途上であると推察された。

2. 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用への支援ニーズについて

会員校における「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用について、「大学全体のカリキュラムに導入予定である」と回答したのは半数であり、看護専門領域での活用については約6割が「活用予定である」と回答していた。活用予定の大学に限らず、活用していない大学であっても、今後の大学での活用に必要なと思う支援や研修についてのニーズとして、「活用している大学の取り組みの紹介・情報提供」、「看護学教育モデル・コア・カリキュラムとの関連性についての説明」、「活用するための教員の研修会やFD企画の支援」が回答校の8割以上が挙げていた。これらのニーズの高さから鑑み、JANPUとしてはこれらのニーズへの対応策の検討を早急に必要であることが示唆された。

V. 今後の計画

本調査の結果、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」のJANPU会員校での活用実態を活用する上での会員校での困難点や課題が明らかになった。活用を予定していない大学では、文部

科学省「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」の活用を優先するという回答や、日本学術会議による「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準-看護学分野」との関係性や違いの理解が不十分であること、また学内の教員間で検討する時間の余裕がないこと、カリキュラムや看護専門領域への導入方法の課題、および教員への周知が不十分であること等、多くの課題が挙げられていた。また、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」をすでに導入している大学や導入予定の大学でも、活用に向けた支援ニーズがあることが明らかになった。

本調査の結果をふまえて、JANPU 看護学教育評価検討委員会は、これらの課題の解決とニーズに応えるために、「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の作成の背景や特徴を改めてわかりやすく説明し、会員校の教員の理解と各大学での活用に向けた方略を具体的に検討できるような研修会の開催を以下のように計画した。

1. 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に向けた研修会の開催

【第1回研修会】日時：2019年8月4日(日) 14:50～15:40 場所：国立京都国際会館

※第29回日本看護学教育学会学術集会での「指定交流セッション」

テーマ：「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用に向けて
—大学における活用状況と活用例—

- 1) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の概要及び活用状況の実態
- 2) 看護学士課程におけるカリキュラムや教育内容を検討する上での活用例
- 3) 看護専門領域での活用例
- 4) 意見交換

【第2回研修会】日時：2019年10月13日(日)13:00～16:00 場所：聖路加国際大学

テーマ：看護学士課程における学生のコンピテンシーの育成
—「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の有効活用—

- 1) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の概要と活用
- 2) 「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」の大学での活用例
 - ・大学全体での活用
 - ・看護専門領域での活用
- 3) 各専門領域および大学全体のカリキュラムへの活用(グループ討議)
- 4) 全体発表・質疑応答

2. 雑誌での広報(雑誌「看護教育」に掲載予定)

3. 活用に向けた支援ガイドの作成に向けた準備

「コアコンピテンシーと卒業時到達目標」を各大学や教員がどのように活用できるのかを解説する「活用支援ガイド」の作成に向けた活動を行っていく予定である。

謝辞

本調査にご協力くださいました JANPU 会員校の看護学教育責任者、看護専門領域責任者の皆様に心よりお礼申し上げます。

資料 1. 看護系大学における「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用実態【調査 A】～看護学教育責任者～

一般社団法人日本看護系大学協議会 会員校各位

看護系大学における「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用実態
および研修ニーズに関する調査【調査A～看護学教育管理責任者～】

<調査の目的・ご協力をお願い>

一般社団法人日本看護系大学協議会では「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（※報告書URL：<http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>）」を平成30年6月に発表しました。看護学教育評価検討委員会では2018～2019年度の活動として、この「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」を各大学の看護学教育に有効に活用していただくための広報活動や研修会等を計画しています。本調査の目的は、これらの活動計画をより効果的に実施するための事前準備として、看護系大学協議会会員校で「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」をどのように活用しているのかについての実態を把握するとともにカリキュラム作成や各科目の授業構築にあたって活用する上での困難点について調査することです。調査結果は、今後の活動である「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用支援ガイドや研修プログラム作成に役立てる予定です。

調査紙は「調査A 看護学教育責任者（学部長、学科長、専攻長など）用」と「調査B 看護専門領域責任者用」の2種類があります。

大学コードを入力していただきますが、これは、①調査紙Aと調査紙Bを結合して解析するためと、②取り組みについて次年度の研修会でご協力いただけるかどうかの連絡に用いるためです。本調査の結果の公表の際には、も大学名が特定されることはありません。本調査への参加は自由であり、参加されなくても大学が不利益を被ることはありません。

ご多忙の折、大変恐縮ですが、本調査にご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

一般社団法人日本看護系大学協議会 看護学教育評価検討委員会
委員長 小山 真理子

※問い合わせ先：一般社団法人日本看護系大学協議会事務局E-mail：office@janpu.or.jp メール件名：「コアコンピテンシー活用実態調査について」としてください。FAX：03-6206-9452

回答にかかる時間は、15～20分程度です。

大学コードをご入力下さい。

--

設問1. 貴大学についてお伺いします。

設問1-1. 設置主体

- ①国立大学 ②公立大学 ③私立大学 ④省庁大学校

回答	
----	--

設問1-2. 看護系学部・学科等名

--

設問1-3. 所在する地域は、どれに該当しますか

- ①北海道 ②東北 ③関東 ④中部 ⑤関西 ⑥中国・四国 ⑦九州・沖縄

回答	
----	--

設問1-4. 看護系学部・学科等が設置された時期は、次のどれに該当しますか

- ①4年以内 ②5～9年前 ③10～14年前 ④15～19年前 ⑤20年以上前

回答	
----	--

設問2. 回答者のあなたについてお伺いします。

設問2-1. あなたの立場は、どれに該当しますか

- ①学長 ②学部長 ③学科長 ④その他

回答	
----	--

上記設問で「その他」を選択された方は、以下にご記入下さい

回答	
----	--

設問2-2. 教員としての経験年数は、次のどれに該当しますか。

- ①4年以内 ②5～9年 ③10～14年 ④15～19年 20年以上

回答	
----	--

設問3. 貴大学においてカリキュラムを改訂するタイミングについてお答え下さい。

設問3-1. 保健師助産師看護師学校養成所指定規則（厚生労働省）の改正後

- ①はい
- ②いいえ

回答	
----	--

設問3-2. 大学の方針に合わせて(随時)

- ①はい
- ②いいえ

回答	
----	--

設問3-3. アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー(以下3つのポリシー)の変更にもなっていない

- ①はい
- ②いいえ

回答	
----	--

設問3-4. 定期的に

- ①はい
- ②いいえ

回答	
----	--

設問3-5. 上記以外の場合は、以下にご入力下さい

--

設問4. 貴大学においてカリキュラムを改訂する際に、参考になっているものについてお答えください

設問4-1. 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（日本看護系大学協議会：JANP）

- ①非常に参考になっている
- ②やや参考になっている
- ③あまり参考にしていない
- ④全く参考にしていない

回答	
----	--

設問4-2. 保健師助産師看護師学校養成所指定規則（文部科学省・厚生労働省合同省令）

- ①非常に参考になっている
- ②やや参考になっている
- ③あまり参考にしていない
- ④全く参考にしていない

回答	
----	--

設問4-2. 保健師助産師看護師学校養成所指定規則（文部科学省・厚生労働省合同省令）

- ①非常に参考になっている
- ②やや参考になっている
- ③あまり参考にしていない
- ④全く参考にしていない

回答	
----	--

設問4-3. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（文部科学省）

- ①非常に参考になっている
- ②やや参考になっている
- ③あまり参考にしていない
- ④全く参考にしていない

回答	
----	--

設問4-4. 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準(看護学分野)（日本学術会議）

- ①非常に参考になっている
- ②やや参考になっている
- ③あまり参考にしていない
- ④全く参考にしていない

回答	
----	--

設問4-5. 上記以外で、貴大学でのカリキュラム作成で参考にすることを以下にご入力下さい

--

設問5. 貴大学において、カリキュラムを改訂する際に、困難なことについてお答え下さい。

設問5-1. 複数の外部指針の存在

- ①はい
②いいえ

回答	
----	--

設問5-2. 教員間の共通理解・合意形成

- ①はい
②いいえ

回答	
----	--

設問5-3. 実習施設の確保

- ①はい
②いいえ

回答	
----	--

設問5-4. 教員の確保

- ①はい
②いいえ

回答	
----	--

設問5-5. 大学の教育施設の不十分さ

- ①はい
②いいえ

回答	
----	--

設問5-6. 3つのポリシーとカリキュラムの整合性の確保

- ①はい
②いいえ

回答	
----	--

設問5-7. 上記以外で困難なことがあれば、以下にご入力下さい

--

以下の設問には、「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」

<http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>をご参照の上お答え下さい。**設問6. 貴大学での「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用状況について以下の設問にお答え下さい。**

設問6-1. 貴大学での現在の活用状況についてお答え下さい

- ①活用している(その具体的な内容を設問6-2にご入力下さい)
②活用を検討している(設問6-3へ)
③活用を予定していない(設問6-4へ)

回答	
----	--

設問6-2. 設問6-1にて「活用している」とお答えの場合、具体的にどのように活用しているかご入力ください

--

設問6-3. 設問6-1.にて「活用を検討している」とお答えの場合、その具体的な内容をお答え下さい。

設問6-3-① 勉強会を開催している

- ①はい
②いいえ

回答	
----	--

設問6-3-② 3つのポリシーなどと照合している

- ①はい
②いいえ

回答	
----	--

設問6-3-③ 既存のカリキュラムと照合している

- ①はい
②いいえ

回答	
----	--

設問6-3-④ 上記以外で検討していることがあれば、具体的な内容をご入力ください

- ①はい
②いいえ

回答	
----	--

設問6-4. 設問6-1にて「活用を予定していない」とお答えの場合は、具体的な理由をご入力ください

--

設問7. 貴大学で「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（JANPU平成30年6月）」を活用する場合に、以下の設問それぞれに関するあなたの考えをお答え下さい。

設問7-1. 学士力と本報告書とのつながりが分かりにくい

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-2. 卒業時の到達目標の抽象度が高い

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-3. 卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては高い

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-4. 卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては低い

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-5. 各到達目標の教育内容の大項目例(カテゴリー名)が分かりにくい

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-6. 教員への周知が十分でない

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-7. 教員の関心・意識が低い

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-8. 検討するための時間が不足している

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-9. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（文部科学省）の方が使いやすい

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-10. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（文部科学省）との関係性・位置づけが良く分からない

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-11. 日本学術会議の大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準(看護学分野)との関係性・位置づけが良く分からない

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-12. どう活用したら良いか分からない

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問7-13. 貴大学で「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の内容を活用する場合、活用しにくいところがあるか、その理由として上記以外の場合、以下にご入力下さい

--

設問8. 貴大学での「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（JANPU平成30年6月）」のカリキュラムへの活用計画についてお伺いします。

設問8-1. 大学全体のカリキュラムに導入予定である

- ①はい
- ②いいえ

回答	
----	--

設問8-2. 各領域で活用予定である

- ①はい
- ②いいえ

回答	
----	--

設問8-3. 各科目（科目担当教員の判断）で活用するように伝達している

- ①はい
- ②いいえ

回答	
----	--

設問8-4. 大学での活用の予定はない（その理由を下記に入力してください）

--

設問8-5. 具体的活用計画を下記に入力してください

--

設問9. 「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」を活用していくにあたり、どのような支援や研修が必要だと思いますか。

設問9-1. 活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問9-2. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（文部科学省）との関連性についての説明が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問9-3. 活用するための具体的な方法の解説が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問9-4. 活用するための相談窓口が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問9-5. 自分の大学のカリキュラムへの導入に対する支援が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問9-6. 活用するための教員の研修会やFD企画の支援が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問9-7. 上記以外に、必要な支援や研修のご希望がありましたらご自由にお書き下さい

--

設問10. 「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（JANPU平成30年6月）」の活用について、ご意見などありましたらご自由にお書き下さい。

--

設問8-5. 具体的活用計画を下記に入力してください

--

【ご協力のお願い】次年度に「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」に関する研修会を予定しております。その際貴大学のコアコンピテンシーの活用例を研修会でご紹介いただけますでしょうか（ご紹介可能な場合は、大学に連絡をとらせていただくことがあります）。

- ①紹介可能
- ②紹介不可

回答	
----	--

資料 2. 看護系大学における「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」
の活用実態【調査 B】～看護専門領域責任者～

一般社団法人日本看護系大学協議会 会員校各位

**看護系大学における「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用実態
および研修ニーズに関する調査【調査B～看護専門領域責任者～】**

<調査の目的・ご協力のお願>

一般社団法人日本看護系大学協議会では「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（※報告書URL：<http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>）」を平成30年6月に発表しました。看護学教育評価検討委員会では2018～2019年度の活動として、この「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」を各大学の看護学教育に有効に活用していただくための広報活動や研修会等を計画しています。

本調査の目的は、これらの活動計画をより効果的に実施するための事前準備として、日本看護系大学協議会会員校で「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」をどのように活用しているのかについての実態を把握するとともにカリキュラム作成や各科目の授業構築にあたって活用する上での困難点について調査することです。調査結果は、今後の活動である「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」の活用支援ガイドや研修プログラム作成に役立てる予定です。

調査紙は「調査A 看護学教育責任者（学部長、学科長、専攻長など）用」と「調査B 看護専門領域責任者用」の2種類があります。

大学コードを入力していただきますが、これは、①調査紙Aと調査紙Bを結合して解析するためと、②取り組みについて次年度の研修会でご協力いただけるかどうかの連絡に用いるためです。本調査の結果の公表の際に大学名が特定されることはありません。本調査への参加は自由であり、参加されなくても大学が不利益を被ることはありません。

ご多忙の折、大変恐縮ですが、本調査にご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

一般社団法人日本看護系大学協議会 看護学教育評価検討委員会
委員長 小山 真理子

※問い合わせ先：一般社団法人日本看護系大学協議会事務局E-mail：office@janpu.or.jp メール件名：「コアコンピテンシー活用実態調査について」としてください。FAX：03-6206-9452

回答にかかる時間は、15～20分程度です。

大学コード(4桁)をご入力下さい(大学コード一覧<http://www.janpu.or.jp/file/janpucode.pdf>を参照)。

大学名をご入力下さい。

設問1 貴大学についてお伺いします。

設問1-1. 設置主体についてお答え下さい。

- ①国立大学(省庁大学校を含む) ②公立大学 ③私立大学

回答	
----	--

設問2. あなたの属性についてお伺いします。

設問2-1. 職位

- ①教授 ②准教授 ③講師 ④その他

回答	
----	--

上記設問で「その他」を選択された方は、以下にご記入下さい

設問2-2. 教員としての経験年数は、次のどれに該当しますか(通算)

- ①4年以内 ②5～9年 ③10～14年 ④15～19年 ⑤20年以上

回答	
----	--

設問2-3. 専門領域(最も近い領域を1つ選んで下さい)

- ①基礎看護学 ②母性看護学 ③小児看護学 ④成人看護学
 ⑤成人急性期看護学 ⑥成人慢性期看護学 ⑦老年看護学 ⑧精神看護学
 ⑨公衆衛生・地域看護学 ⑩在宅看護学 ⑪看護教育学 ⑫看護管理学 ⑬その他

回答	
----	--

上記設問で「その他」を選択された方は、以下にご記入下さい

--

以下の設問には、「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」
<http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>をご参照の上お答え下さい。

設問3. あなたの領域が担当する講義・演習・実習での、「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標 (JANPU平成30年6月)」の活用状況について以下の設問にお答え下さい。

設問3-1. 現在の活用状況についてお答え下さい

- ①活用している(その具体的内容を設問3-2にご入力ください)
 ②活用方法を検討している(設問3-3へ)
 ③活用を予定していない(設問3-4へ)

回答	
----	--

設問3-2. 設問3-1にて「活用している」とお答えの場合、具体的にどのように活用しているかご入力ください

--

設問3-3. 設問3-1にて「活用方法を検討している」とお答えの場合、その具体的な内容をお答えください。

--

設問3-3-① 勉強会を開催している

- ①はい
 ②いいえ

回答	
----	--

設問3-3-②. 他領域と検討している

- ①はい
 ②いいえ

回答	
----	--

設問3-3-③ 既存のカリキュラムと照合している

- ①はい
 ②いいえ

回答	
----	--

設問3-3-④. 領域独自の目標とすり合わせを行っている

- ①はい
 ②いいえ

回答	
----	--

設問3-3-⑤ 上記以外で検討していることがあれば、具体的な内容をご入力ください

--

設問3-4. 設問3-1にて「活用を予定していない」とお答えの場合、具体的な理由をご記入ください。

--

設問4. あなたの領域で「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（JANPU平成30年6月）」を活用する場合に、以下の設問それぞれに関するあなたの考えをお答え下さい。

設問4-1. 学士力と本報告書とのつながりが分かりにくい

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問4-2. 卒業時の到達目標の抽象度が高い

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問4-3. 卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては高い

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全くそう思わない

回答	
----	--

設問4-4. 卒業時の到達目標のレベルが学士修了時としては低い

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問4-5. 各到達目標の教育内容の大項目例(カテゴリー名)が分かりにくい

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問4-6. 教員への周知が十分でない

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問4-7. 教員の関心・意識が低い

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問4-8. 検討するための時間が不足している

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問4-9. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（文部科学省）の方が使いやすい

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問4-10. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（文部科学省）との関係性・位置づけが良く分からない

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問4-11. 日本学術会議の大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準（看護学分野）との関係性・位置づけが良く分からない

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問4-12. どう活用したら良いか分からない

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問4-13. 上記以外に、あなたの領域で「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（JANPU平成30年6月）」の内容を活用しにくい理由があれば、以下にご入力下さい。

--

設問5. 「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（JANPU平成30年6月）」を活用していくにあたり、どのような支援や研修が必要だと思いますか。
以下の支援や研修についてあなたの考えをお答え下さい。

設問5-1. 活用している他大学の取り組みの紹介・情報提供が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問5-2. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム（文部科学省）との関連性についての説明が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問5-3. 活用するための具体的な方法の解説が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問5-4. 活用するための相談窓口が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問5-5. 自分の大学のカリキュラムへの導入に対する支援が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問5-6. 活用するための教員の研修会やFD企画の支援が必要である

- ①非常にそう思う
- ②ややそう思う
- ③あまりそう思わない
- ④全く思わない

回答	
----	--

設問5-7. 上記以外に、必要な支援や研修のご希望がありましたらご自由にお書き下さい

--

設問6. 「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（JANPU平成30年6月）」の活用について、ご意見などありましたらご自由にお書き下さい。

--

【ご協力のお願い】次年度に「看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」に関する研修会を予定しております。その際貴大学のコアコンピテンシーの活用例を研修会でご紹介いただけますでしょうか（ご紹介可能な場合は、大学に連絡をとらせていただくことがあります）。

- ①紹介可能
- ②紹介不可

回答	
----	--